

平成22年度

修士論文

中国山西省の明代「太原県城」における四合院住宅の空間形態分析および
その保全・再生手法の提案

指導教員 富岡 義人 教授

三重大学大学院工学研究科

建築学専攻

劉 煥頤

A Morphological Analysis on the Spatial Form of Si-He-Yuan (Courtyard House)
in Taiyuan Capital from Ming Dynasty in Shanxi Province, China
Together with Some Recommendations for Conservation / Renovation Project
of the District

LIU HUANYI

2011. 1

第1章 序論

- 1. 1 研究の目的
- 1. 2 研究の背景
 - 1. 2. 1 中国社会において住居形態の変容について
 - 1. 2. 2 建築文化財の保護について
 - 1. 2. 3 山西省の「古城」と四合院住宅
 - 1. 2. 4 太原県城の復元の経緯
- 1. 3 既往研究
- 1. 4 研究の方法
 - 1. 4. 1 研究の枠組み
 - 1. 4. 2 調査方法（第2章）
 - 1. 4. 3 分析方法（第3章）

第2章 太原県城の調査とその結果

- 2. 1 調査の経緯
 - 2. 2 地区の概要
 - 2. 2. 1 歴史関係
 - 2. 2. 2 現状の様相
 - 2. 3 地区の全体構成
 - 2. 3. 1 全体配置図
 - 2. 3. 2 機能関係
 - 2. 3. 3 基本構成
 - 2. 4 太原県城地域の四合院住宅
 - 2. 4. 1 「四合院」の概説
 - 2. 4. 2 太原県城地域の四合院の特徴
 - 2. 5 太原県城における四合院の空間形態の特質
-

- 2. 5. 1 空間形態の分析方法
- 2. 5. 2 平面構成の図式
- 2. 5. 3 構成要素と特質
- 2. 5. 4 まとめ
- 2. 6 現地調査に対する取り組みの聞き取りとその課題
 - 2. 6. 1 王金平氏からの聞き取り
 - 2. 6. 2 考察

第3章 太原京城の保全と再生方法の提案

- 3. 1 太原京城と四合院住宅の相互依存する関係
- 3. 2 現代社会の視点からみた四合院再生の可能性
- 3. 3 太原京城の全体の把握
 - 3. 3. 1 町の位置づけと問題点
 - 3. 3. 2 観光と住居機能のバランス
- 3. 4 四合院を再生・利用した集合住宅の提案
 - 3. 4. 1 基本構想
 - 3. 4. 2 太原京城の提案について

第4章 結論

- 4. 1 結論
- 4. 2 考察

参考文献・図版出典・謝辞

中国近年来，伴随着大规模房地产开发，无论是城市，或是一般城镇，各地方历史街区都以空前的速度持续减少，由此带来的结果是，城市构成趋于一致，各地方地域性特点也便越来越模糊。本论文中，从山西太原的一个古老的太原县城出发，在对其进行调查的基础上，对县城存在的四合院住宅的空间形式进行比较分析；在对住民的生活情况的了解之上，提出可以让其持续生存的环境改善的提案。

第一章为序论。作为研究背景的论述，首先对近几十年来中国社会的居住形态的变容进行论述；我国对古建筑文化遗产的保护相关的法规政策的提及，其时代的先后与欧美以及日本等国家进行对比；另外从山西省广域的范围角度出发，总体的说明该地域的古城以及四合院民居的分布以及特点；提及到太原县城，对其基本情况以及现在该地进行的复原古城的事业进行探讨；最后，在对既往研究的列举中得到本文所在的位置。

第二章是对太原县城的调查报告。先是调查的过程和方法，地区的历史概要等等；然后基于在对该地区调查所取得的数据图形资料之上，对地区整体的构成，以及四合院的现状和在县城中的分布等进行分析；对于其空间形态的分析，在调查过程中用草图记录，实际测量，以及现场照片的调查手段，对该地区四合院住宅的空间形态特质进行观察和记录。首先，从5个典型的四合院住宅中，对其平面构成原理进行分析，使其类型化，得出典型的图示化后的平面类型。其次，从四合院的入口，中门，中庭，室内，细部等5个构成要素进行分析，以及从入口到院内的视线展开的画面变化进行观察，得出该地区四合院空间形态的同一性，以及与其它地区比较的相异性，由此得到其空间形态特质的结论。另外，在实地调查之余，笔者又对太原理工大学的王金平教授进行了访谈，对于山西省内，类似于太原县城这样的历史街区保护和再生的惯用手法以及意见等进行了了解。

第三章是对太原县城保全再生手法的提案。理论上的论证部分，首先明确了县城存在的四合院住宅是对县城保全再生事业的重要组成部分，县城和其

中的四合院互相依存，唇亡齿寒；其次，对现代社会中，四合院有可能的几种再生手法进行列举，也就是说论证了四合院在现在社会中是可以进行更新以及再利用的理论；与此同时，对现县城复原事业中存在的问题进行了再探讨，特别是，县城保全的过程中，作为住宅区和观光地两者的平衡的把握。

具体的提案部分中，笔者提出可参照山西本来的明清时代商人宅邸式样的城堡式体系的四合院原型，将四合院住宅有机的集合住宅化，再保全其整体的空间形态的基础上，内部空间进行重新的功能配置，来符合现代人的生活要求；另外对四合院中庭的价值以及作用进行了明确，在当今社会中，作为一个可以进行更好的邻里沟通的半公共空间的中庭，对住民之间的交流等提供了可能性；由一个一个四合院的集合住宅单位组成一个整体的街区，理清居住单元，共用中庭，以及四合院外道路三者的关系，对传统街区的理解，以及在现代社会的活用，笔者依次进行了论述；最后以县城内一个街区为例，为了更有效的改善该地区居住环境，笔者提出了一些四合院改造的构想事例，以及街区内停车场的整备，给水排水系统的更新，袋装小路的设置等等的建议。

第四章为本论文的结论部分。通过实地调查，对太原县城的地区构成以及内部的四合院住宅的空间形态特质等进行了明确化。另外四合院中空间构成中视线的展开以及四合院平面构成方法等进行了图示化的说明。提案部分提出了对县城中存在四合院进行再利用，以及将其再生，成为拥有良好居住环境的街区的构想。提出对类似于太原县城这样的传统历史街区而言，它们所需要的不是单纯的复原式的修复，而是顺应当代人生活的方式，大胆的进行改造和再生的观点。

第一章 序論

1. 1 研究の目的

本論の目的は山西省太原市の太原県城（現在の晋源鎮）の調査を通じて、その現状と住居実態を把握するとともに、歴史的市街地に多く残る四合院住宅の形態を分析し、さらに、その住環境の維持再生手法を提案することである。

本研究の根本にある意識は、調査対象において、「復元事業」を再検討することを通じて、各地方が地域性をもつ歴史的な住まい環境を重視しつつ、現在の社会に適応して優れて住環境が形成されるべきだという考えである。その際、歴史的な街区の構成、並びに、それを成立させている都市住居群は可能なかぎり温存させつつ、新たな改修、再生技法が工夫されなければならない。そのことは伝統的な街によくみられる独自性をよく視野に入れつつ行われなければならないことは当然である。これから、歴史遺構に新たに対応手段が必要であり、単純な復元式な修復ではなく、適度な大胆に現代的な改修、再生することを提唱する。歴史的な建物に対して、現代社会で生きている機会を与える方法を探求することである。

1. 2 研究の背景

1. 2. 1 中国における住居形態の変容

1980年代に入ると、改革開放政策や市場経済の導入に伴い、中国社会で、住居形態の変化もよく見られるようになった。昔大家族と単位する低層の四合院で皆共同に生活する情景は、現在すでに消えている。「一人っ子政策」により、一つの家族で一人の子供が生まれることしか許されず、現在、ほとんど3人か、4人かの家族構成になっている。昔の町家型住居は今時の高層集合住宅の体系に取り替えられている。計画経済時代の住宅を割り当てる制度から、今時の自由型商品住宅まで転換され、都市中心部でも、郊外でも、商品型住宅団地が次々と出現し、不動産の開発が物凄いスピードで進んでいる。

中国は、元々の人類によって古代文明発祥の地として、巨体な国土面積をもつ、多民族が共同生存し、長い歴史を通じて、多様な地域的、また民族的な文化を形成できるという国である。住居面といえば、様々な住居形態も形成できている。逆に、その固有な特質から、各地域、また各民族の個性もよく分かれる。

近年以来、「現代化」を目指した目標を益々に推進していくとともに、様々な社会問題も出てきたと見える。住居面においては、現在巨大都市だけではなく、小規模の都市も、高層マンションが次々とでき上がり、各都市の地域性が曖昧になってしまっている。昔の伝統的な市街地が急勢な勢いで消滅しつつあり、跡地に高層ビルやオフィスが建設された結果、地域社会の崩壊、都市空間の均質化などの深い問題が生じている。これからどうやって土地開発と伝統的な住居形態を保全・再生を両立させるのか、あるいは、固有の地域性をどのように保有していくのか、各地方としても大きな課題である。

1. 2. 2 建築文化財の保護について

建築文化財の保護は、イギリスとフランス各国1880年代前後、歴史建造物保護法を確立したのは一番早かった。(表1-1より)

1930年、中国では、当時の中華民国南京政府立法院によって、「古物保存法」を根拠法とする一連の法規が制定され、1937～45年の中日戦争、その後1945～49年の中国内戦のため、法制などは十分に機能しなかったといわれる。

1950～60年代、終戦した後、日本、ドイツ、アメリカ諸国が、文化財保護法が制定され、歴史環境の整備事業が始まったとなっている。

諸外国と比べると、中国の文化財保護法律の制定した時期が元々遅くないと理解した。1949年中華人民共和国が成立し、1966～76年「プロレタリア文化大革命」によって、中国全般の法制度整備は定時停滞した。都市計画行政の停止に伴い、都市の建設も無政府、無計画の状態に陥り、城壁のレンガを再利用され、城壁の立地する土地を道を建設し、多く明代前後に築かれた城壁、及び旧市街地が破壊され、歴史的都市の都市形態の基盤は回復できないほど変容した。

「文革」後期から、政府において社会的混乱と経済発展の停滞が意識され、政治路線及び経済政策が大きく転換され、文化遺産保護制度を規定している「文物保護法」が1982年に制定され、その後、社会の変化に対応するため、2002年に改正され、これ以降現在まで使われている。建築など有形の文化遺産は政府の関係部門に指定され、その種類は文物保護単位、歴史文化名城、歴史文化名鎮、歴史文化名村、風景名勝区などの種類があり、文物保護単位については国家級、省・自治区・直轄市級、県級の3段階、他は国家級と省・自治区・直轄市級の2段階がある。

本稿の研究対象太原県城は、確かに「文革」の破壊を受けたが、町内部基本な構成がまた見えられ、「民居」遺産として、大部の四合院住宅が残され

ている。近年、復元しようとする運気が高まり、「歴史文化名城」の称号も申請していることが明らかにした。

その以外に、中国において、建築文化財を保護する事業に力を尽くした人物、また彼らの旧市街地に関する理論研究と実践を述べにいく。

1950年代中国歴史に大きく影響がある人物梁思成氏*1は、北京の旧城保護の計画を提出し、残念ながら、当時の社会情勢のため、実施されなかった。計画中で、北京の旧城をそのまま保全され、その西で、新城をつくろうと主張した。結局、北京旧城の城壁を壊され、その跡地の上現在の二環道路をできて、現在まで、六環道路も使えるようになって、無限的に拡大している巨大な都市が形成した。

その後、梁思成の学生であった呉良傭*2教授、1970年代から、旧城保護の事業に力を尽くし、1980年北京四合院の有機理論を提出し、菊児フートンの改造を通じて実現できた(写真1-1～1-3)。呉良傭教授の有名な発言に、「都市は人類と同じような新陳代謝が要る。都市の変化は細胞の更新と一緒だと理解され、この更新は有機的な変化である。四合院は北京の細胞のような、街路の構成などは北京固有の骨である。もしこの以上のものが無くすれば、北京の性格もなくなるだろう」という言葉がある。

*1, 梁思成 (1901～1972) 建築史家、建築家。元清華大学建築学部学部長。中国の古代建築と文化遺産の保護事業と基礎する重要な人物である。

*2, 呉良傭 (1922～) 都市計画と建築学家、清華大学建築学科の創始人の一人、中国固有文化を保護しようと提唱し、北京菊児フートン改造を提案し、中国の都市発展に巨大な貢献した人物である。



写真1-1 菊児フートン

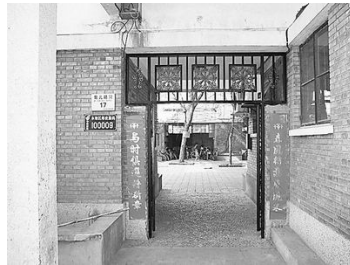


写真1-2 菊児フートン



写真1-3 菊児フートン

以上三つの写真の出典：<http://www.chla.com.cn/html/c180/2009-02/28144p4.html>

表1-1 文化財の保護事業に関する年表

	1850	1900	1950	1960	1970	1980	1990	2000
外国諸国	1882年イギリス、歴史建造物保護法の確立 1887年フランス、歴史建造物保護法の確立		1950年日本文化財保護法の成立 1958年ドイツ文化遺産保護法の制定	1960年アメリカ国家歴史保護法の制定				
中国		1930年南京国民政府最初の文物保護制度を提出した。	×			1982年中国文物保護法の制定	1986～1994年国家級歴史名城の指定	2002年国家歴史名鎮、名村の指定
関係歴史事件		1919年辛亥革命 1912年中華民国の成立			1978年改革開放政策の提出			
		1937～1945年日中戦争 1945～1948年内戦	1958～1960年大躍進運動	1966～1976年文化大革命				
理論の研究			梁思成氏と北京の保全計画		呉良傭氏と北京保全計画事業の続き	1988年呉良傭氏と菊児フトン-有機的な四合院更新理論の実現		
国連憲章の発表		1933年アデネ憲章		1964年ヴェネツィア憲章		Historic Gardens (Florence Charter 1981)	Charter on the Built Vernacular Heritage (1999)	ICOMOS Principles for the preservation and conservation (2003)

1. 2. 3 山西省の「古城」と四合院住宅

(1) 古城

「古城」といえば、古い城の意味であり、建設年代によって古い程度が判断されるという理解が確かにある。また、「城」の概念は世界的に共通だが、その形態が異なっている。

「城とは、敵に攻め込まれた際の防衛拠点として設けられた構造物。戦闘拠点であるとともに、食糧や武器や資金の集積場所でもある。主要な城は指揮官の居所であり、政治や情報の拠点であった。

ヨーロッパ、中国などの大陸では、都市を囲む城壁と砦のような戦闘拠点とを区別し、ドイツ語では **Stadtmauer** と **Burg**、英語では **city wall** と **castle** として区別する。城という文字は中国では前者の城壁都市を意味していたが、日本においては城壁都市が普及しなかったこともあり、主に後者の意味で使用される」

-<http://ja.wikipedia.org/wiki/城> より

日本の「城」の概念と違い、中国の「城」は、本来城壁のことを意味し、都市や村など居住地全周を囲む防御施設を指すことが多い。大規模なものは、宮殿など支配者の住む場所を囲む内城と、都市全域を囲む外城に分かれており、内城は城、外城は郭と呼ばれ、全域は城郭都市といわれる。

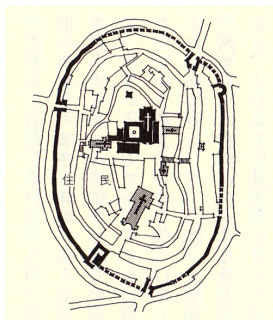


図1-1 ユーロッパの中世都市
「世界建築全集7」 西洋Ⅱより

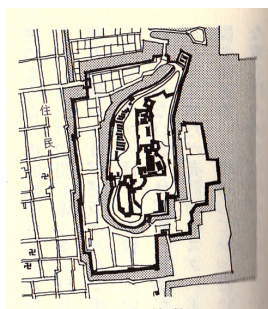


図1-2 日本の城下町
日本建築学会編「日本建築史図集」より



図1-3 中国の城郭都市
王金平「山西民居」より

(2) 山西省の古城

現在山西省地区は、春秋時代には元の晋国の領域に属し、その後、晋の領域が趙、韓、及び魏に分裂された。これは中国の歴史として、「三家分晋」という重要なものである。

明代（1369年頃）では、「山西行中書省」、清代では「山西省」と「山西」の名称が使われていた。中華民国が成立した後（1920年代）「山西省」の区画が設置されはじめ、現在の中華人民共和国（1949年～）でも、この区画を引き続き用いる。

中原地域の地理条件は複雑である。山西省は軍事要地として、必ず土地獲得の為に、争う際場所であった。だから、防御するため、ここに、城を築くのは古来から多くあった。また、複雑な地理条件のため、通路を建設するのは非常に難しかった。地域内の文化財、また「古城」などがたくさん残っているのはそのためである。例えば、平遙古城、孝義古城、榆次老城などといういくつかの典型的な町は現在も利用されている。中国で、「昔の文化財なら、地下は陝西、地上は山西」ということわざがある。

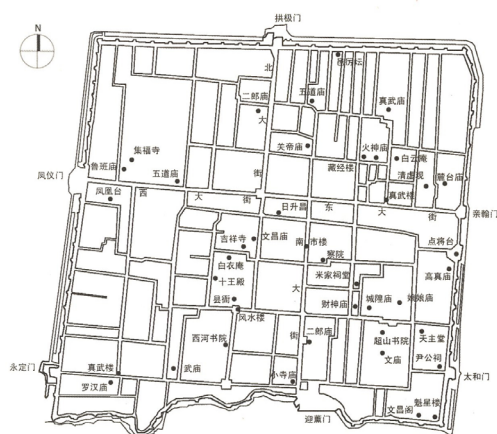


図1-4 平遙古城の平面
王金平「山西民居」より



写真1-4 平遙古城 筆者撮影

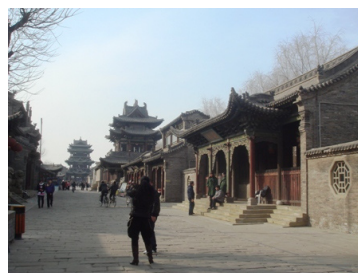


写真1-5 榆次老城 筆者撮影

研究対象とする太原県城は、明時代「県城」（県を中心地）という地位でつくられた町である。現在その中に残っている城壁、城門、また伝統住居環境をみると、明、清時代の「古城」の一つであったと判断できる。太原市はここを重要な歴史的な町として保全、開発している。

(2) 山西省の四合院住宅

山西省は古来石炭や鉄の資源が豊かな町と知られ、五代時代以後、商人の勢力が形成されはじめ、最も活躍したのは明、清時代である。清代には為替、両替、造幣と主する事業などが経営され、当時は、山西省商人の店舗などが全国範囲に広がっていた。また、官界が影響力をもち、土地に対して積極的に投資し、省内各地区で自邸を築き始めた。現在、彼らの町家は多く残っている。その形は中国華北地区の四合院住宅に属し、重要な民間文化財産として保護されている。地域によって、晋北、晋中、晋東南、及び晋南四合院という類別がある。（「晋」は山西省の略称である。）

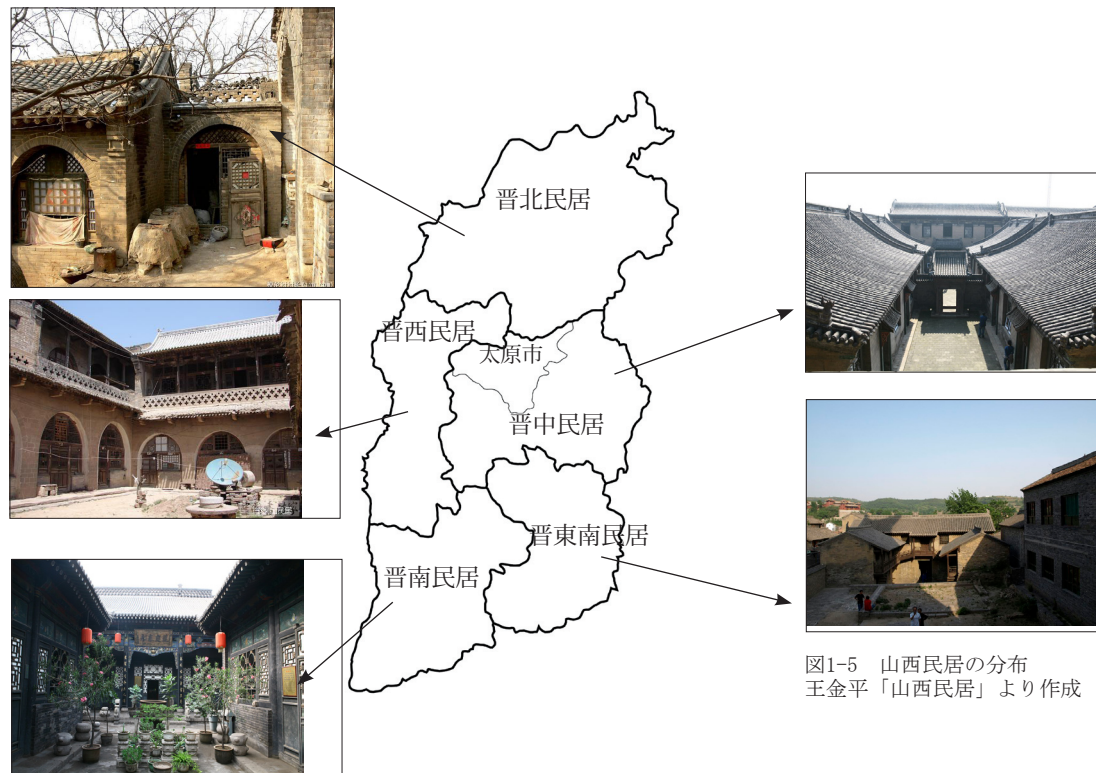


図1-5 山西民居の分布
王金平「山西民居」より作成

分布図をみると、太原市は晋中地域に位置し、調査対象とする太原県城中の四合院住宅が晋中民居に属することがわかる。（具体的な内容を第二章で説明する。）

山西省では、都市でも、農村集落でも四合院住宅を見つけられる。様々な四合院住宅が集まっている古い町（古城）へ入ると、それぞれは当地の道路システムと関連し、古くても豊富で多彩な都市空間を形成している。当時の社会構造、家庭組織、文化や芸術、建築技術など各方面の状況を体現され、建築専門だけではなく、いろいろな領域の研究価値があると思う。しかし近年、大規模な不動産開発に伴い、現代社会に対してこれからどういう風に古い町と共生していくのかが大きな課題になるだろう。

だから、山西省において、その地方社会特有の住民活動に応じて育まれてきた四合院住宅を重視して研究を行うことは、非常に意義のあることである。

1. 2. 4 太原県城の復元の経緯



図1-6 地理位置の関係

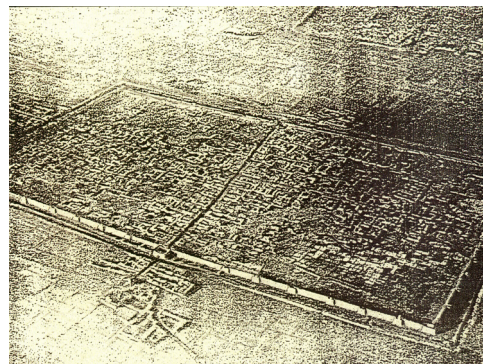
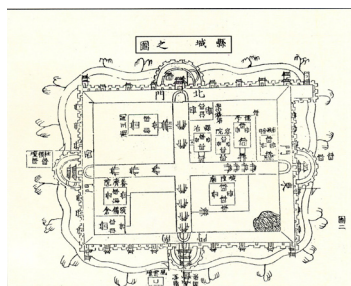
写真1-6 1950年代太原県城の航空写真
「太原県城古蹟図録」より

図1-7 明代太原県城の配置図

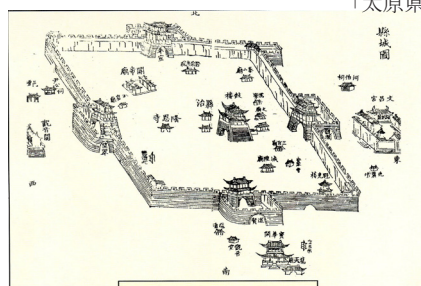


図1-8 清代太原県城の配置図

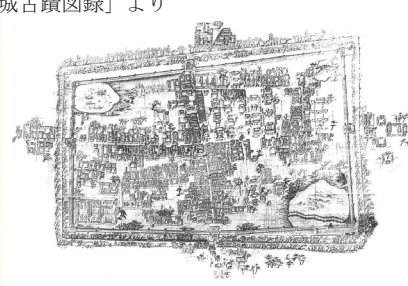


図1-9 清代の太原県城

図1-7～1-9「太原県城古蹟図録」より

太原県城は晋中盆地の北、現在の太原市南部晋源区に位置し、海拔は781.8～851.0mである。重要な歴史的市街地に指定されており、現在晋源鎮と呼ばれている。その区画は南北約750m、東西1150mの範囲に位置し、3km西には呂梁山脈があり、3km東には黄河第二の支流汾河が南北に貫いている。太原県城は山西省で晋陽古城遺跡（BC770年ごろの春秋戦国時代のもの）内にあり、明時代（1375年前後）は「県城」（県の中心地）という地位の都市として造り上げられた。以後600年ほど、中華民国まで、太原県城という名前が用いられていた。

1949年中華人民共和国の成立以後、1960年代末に、プロレタリアート文化革命が勃発し、他の各都市と同様、大きな被害を受け、「田園化」と名付けられた政策によって、城壁やお寺など、また南の城門も取り壊された。幸いなことに、県城中の町並みや古い民家などは概ね半数が残された。1990年代以後、研究と調査、伝統的なまちづくり活動が行われはじめ、様々な民間研究会が開かれるようになって、県城を復元する気運が高まった。

現在、県城に住んでいる住民たちが生活をつづけるられるように、現存している大量の四合院住宅の保護や修繕を行っている。県城内の歴史的建築の総面積の80%以上は明清時代残った四合院住宅である。つまり、四合院住宅の保護は町全体の復元や住環境の改善にとって、重要な意味があり、住民としても大事なプロジェクトである。



1-7 写真 太原県城 北の城門
筆者撮影2009年9月



1-8 写真 孔子廟
筆者撮影2009年9月



1-9 写真 修復した主街の一部(200m)
筆者撮影2009年9月



1-10 写真 修復した四合院住宅
筆者撮影2009年9月

1. 3 既往研究と本研究の位置づけ

これまで、同じような視点から中国の歴史的市街地と四合院住宅の保全問題について扱った研究は、歴史的市街地の保存・再生に関する研究、中心市街地における歴史的環境保存運動の展開とそのプロセスに関する研究が多く存在している。

(1) 制度の面

●葉華，浅野聡，戸沼幸市：「中国における歴史的環境保全のための歴史文化名城保護制度に関する研究 ―名城保護制度の枠組みの整備過程の特徴と課題」

(2) 保全、活用手法の面

●謝璞：「歴史的建築(四合院)再生による北京豊盛地区都市住まい空間の再構築 ―歴史性を根拠としての持続的空間デザイン」， 京都精華大学紀要 (31)， pp. 17-49， 2006.

論文の視点

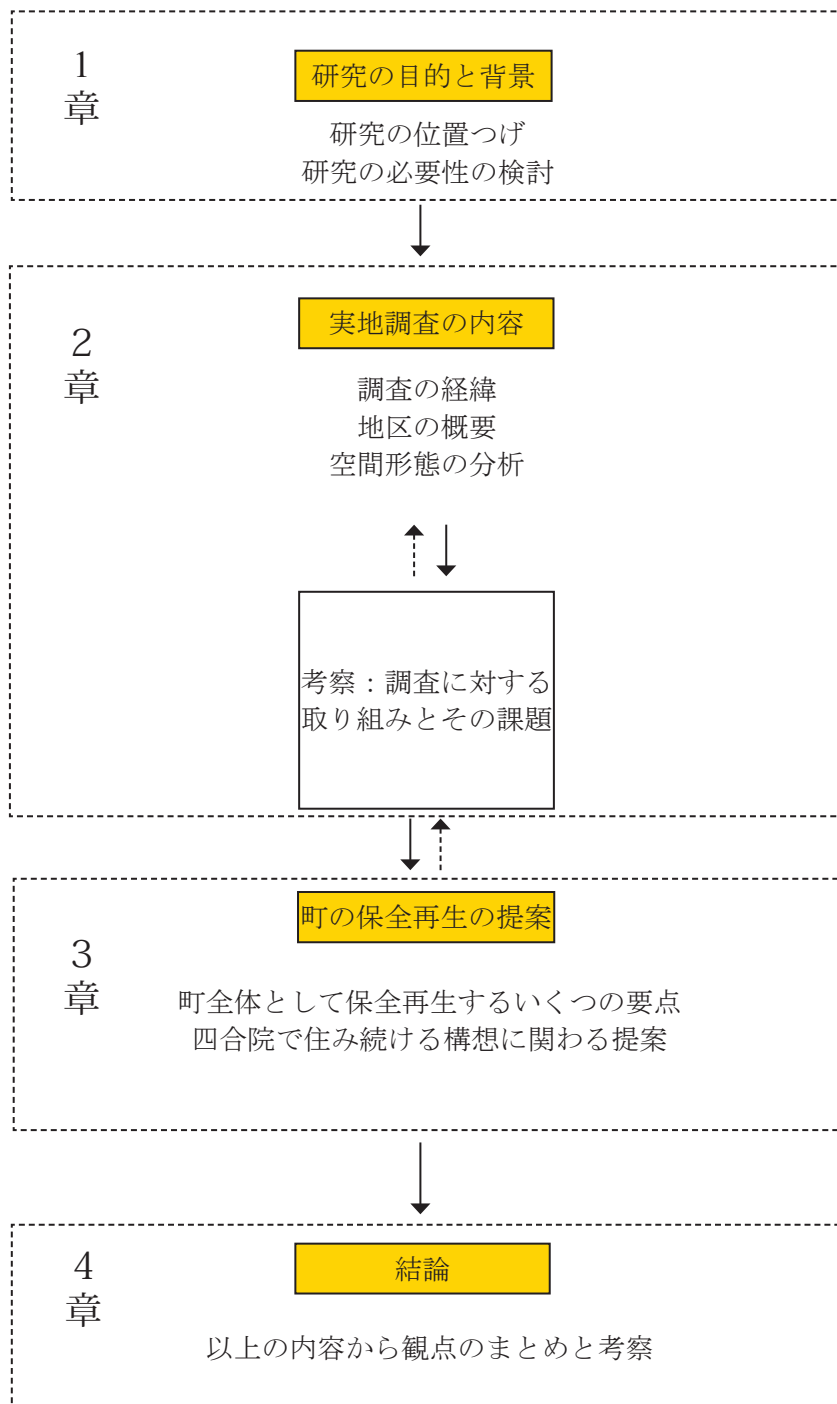
北京豊盛地区住まい空間の再構築と例して、歴史性を根拠としての持続可能な北京都市住まい空間デザインへの提案を論じていた。

現代ライフスタイルと歴史性の強い空間の支配下，懐の内で互いに他を強調する効果，豊かな内的精神世界を持ち，少子高齢化社会が到来している社会変化の中で，生活空間を再考していった。伝統を伝え続けるという心構えて，新たな歴史と伝統を形成していくと期待されていた。

本研究は北京のような大都市とは対比的な地方都市において、その地域特質や活用の可能性などを指摘するものである。

1. 4 研究の方法

1. 4. 1 研究の枠組み



1. 4. 1 調査の方法（第二章）

現地調査は、2009年9月10日～14日）と2010年8月26日～31日と二回目を分けて、行った。

一回目の調査は、外観の観察調査で、現地を視察するかたちで行った。最初の町全体像の印象を築くため、目視と写真撮影により建築的様相を確認し、それをスケッチすることでその特徴を記録した。ヒアリング調査として、当地の住民たちのこえを先ず聞いた上で、関係ある各機関、組織を訪れた。その際、太原市都市計画研究院、文物局、太原県城保護協会の担当者へのヒアリング調査を通じて、太原市における町並み保存の事業の展開と、太原県城保全プロジェクトの進み方などを明らかにした。

資料の収集について、太原市測量設計院、土地民間県城保護と開発組織から、県城の配置図や既往研究などを取得できた。

二回目の調査は、現地へもう一回行って、その保全プロジェクトが進んでいる状況を考察し、当時まで整備されたものを確認することができた。そして、実測に参加し、各必要な項目を設定し、建物的様相を整理した上で、具体的な空間形態などを把握できた。

また、山西省四合院を研究した先生にインタビューをして、当地で古い町に対して、普段実行する方法や問題点などを教えてもらった。

最後に、土地民間県城保護と開発組織関係者の方たちから、その時まで
の、町の保全プロジェクトの保全方針、実施手段などの情報*1をききとつた。

*1, 東南大学建築設計
研究院 「明・太原県
城歴史旧市街地の計画
案」より 2009年1月

1. 4. 2 分析の方法(第三章)

先ず太原県城と、その中に存在している四合院住宅の関係を論じて、両者が相互依存していることを明らかにする。太原県城が保全されることが中の住まい環境が生きていけるの前提である。逆に、その四合院住宅が町の構成の非常に重要な一部である。もしなくなれば、その町の存在としては、歴史的な価値も消滅される可能である。

そして、何のために四合院住宅を保全、再生するのか、現在社会では、持続に使用する幾つの可能性を述べる。それから、太原県城を具体的な例として、全体から、住居環境まで提案し、地区の活性化に意見を提出する。

第二章 太原県城の調査とその結果

2. 1 調査の経緯

●1回目の調査

時間：2009年9月10日～14日

訪問した場所／関連部門：

太原市晋源鎮（太原県城）

太原市都市計画設計院

太原市文物局局長

太原市測量設計院

土地民間県城保護と開発組織

調査テーマの設定と目的：

- (1) 県城の現状を認識する→基本的な資料を収集する
- (2) 関係の部門を訪れる→担当者とヒアリングする
- (3) 太原市都市プラン展示ホールへの見学→都市計画の観点から、太原県

城の把握

●2回目の調査

時間：2010年8月26日～31日

訪問した場所／関連部門：

太原市晋源鎮（太原県城）

土地民間県城保護と開発組織

太原理工大学

調査テーマの設定と目的：

- (1) 県城中の四合院を訪れる→5軒を選定して、実測を行う
- (2) 現行保全計画内容を考察する→復元計画の展開状況と基本方針などを

明らかにする

- (3) 山西省四合院を領域している先生とインタビューする→当地の専門家からの意見を聞き取る
-

2. 2 地区の概要

2. 2. 1 歴史関係

(1) 区域所属

太原市は、6市轄区、1県級市と3県でなり立っている。

その市轄区は小店区、迎沢区、杏花嶺区、尖草坪区、万柏林区、または晋源区六つで構成されている。中でも国家級文化財が多く存在する晋源区は太原市南部に位置し、晋陽古城*1遺跡は晋源区の一部の地域範囲を占めている。太原県は明代以後、晋陽古城遺跡の上に建てられ、今晋源鎮と呼ばれた町である。

(2) 歴史の沿革

表2-1歴史の沿革

晋陽古城	春秋時代(BC770年～BC403年)		春秋時代の大国晋の都であった。紀元前497年、晋の有力家系・趙氏の当主趙簡子が晋陽の町(晋陽古城)を築いたことが太原の歴史の始まりとされる。
	隋(581年～618年) 唐(618年～907年)時代		隋代には、長安・洛陽に次ぐ黄河流域第三の都市になっており、唐の李淵はここで起兵し唐を興した。この由緒から唐の時代に太原府(晋陽古城)は陪都*2として「北都」「北京」とされ、京師(西都)長安、東都洛陽に次ぐ都となり、これら三つの大都会が三都と称された。
	宋時代(960年～1279年)		979年に宋の太宗(趙匡義)が火攻めと水攻めで太原県(晋陽古城)を荒廃した。その後、汾河沿いの現在地へ西に10km移動していたところで平晋県という新しい町を築いた。
	明時代 (1368年～1644年)	洪武四年 (1371年)	平晋県は洪水で水浸しになり、その県治(県の中心地)は晋陽古城遺跡の上に再建された。これが現在称している太原県である。
太原県城		洪武八年 (1375年)	「太原県」と名前を変えた。
	近代以後 (1912年～)	1946年～1948年	当地政府は太原を守るため、様々な防御工事を行い、町中の古い建物を一部を壊し、トーチカなどを築いた。
		1958年～1978年	大躍進政策と文化大革命が勃発し、大きな被害を受けた。「田園化」名付けられた政策によって、城壁やお寺など、また南の城門も取り壊された。
		1990年～	研究と調査、伝統的なまちづくり活動が行われはじめ、様々な民間研究会が開かれるようになり、県城を復元する気運が高まった。

*1 晋陽古城 (BC770年ごろの春秋時代～宋初) 重要な軍事、政治要地である。唐代の「別都」となり、三晋文化の発祥地、近代太原市の前身である。

*2 陪都：唐の時代に太原府は「北都」「北京」とされ、京師(西都)長安、東都洛陽に次ぐ都となり、これら三つの大都会が三都と称された。

表2-1より、太原県城は明時代に「県城」という地位の都市として造り上げられ、元晋陽古城が選択した自然環境や人文環境を引き続き用いるようになった。

(3) 近代の太原市と太原県城の関係

最初の太原城（晋陽古城）の上に建設されたので、「太原」の名が受け継がれていた。宋時代から、壊された晋陽古城の北に、「太原府」を新設され、これは今の太原市の昔の立地位置である。

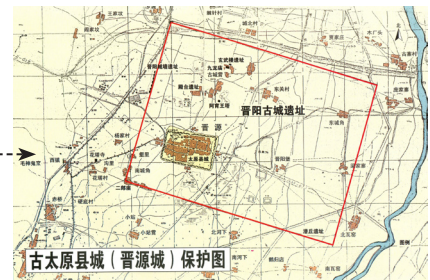
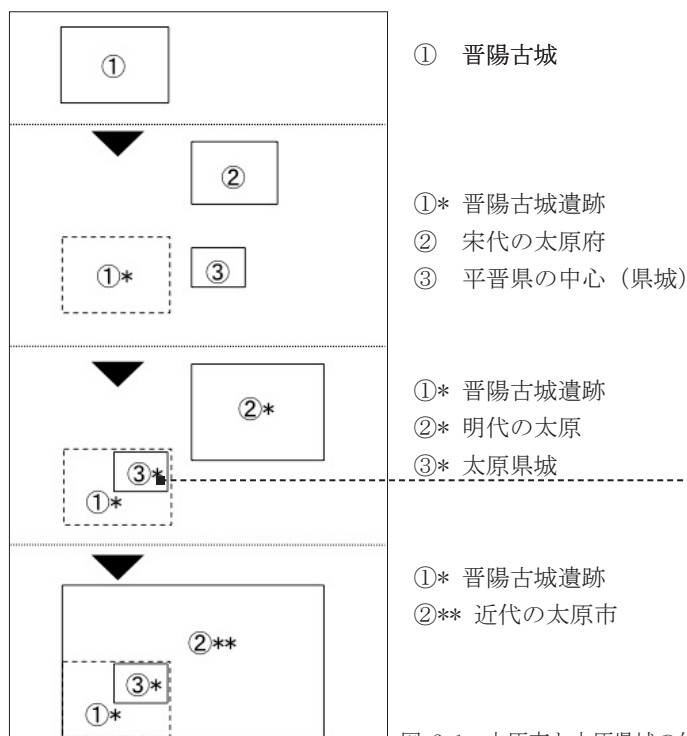


図 2-2 晋陽古城遺跡と太原県城の位置関係
「太原県城古蹟図録」より

図 2-1 太原市と太原県城の位置関係の発展
筆者作成

図2-1、2-2より、太原府（近代太原市の前身）と太原県が同時に両立していたことがある。「県城」という規制でつくった町として、歴史的な観点から見れば、文物として大事に保存するほど、価値が高くないと判断されている。ただ、明清時代から現代にいたるまで、その時代の町の様子があまり変わってなく、また大部の四合院住宅を使われている現実と観察できる。住民たちが住み続けるように、保全や再生など行うべきだと感じていた。

2. 2. 2 位置関係

(1) 太原県城と太原市

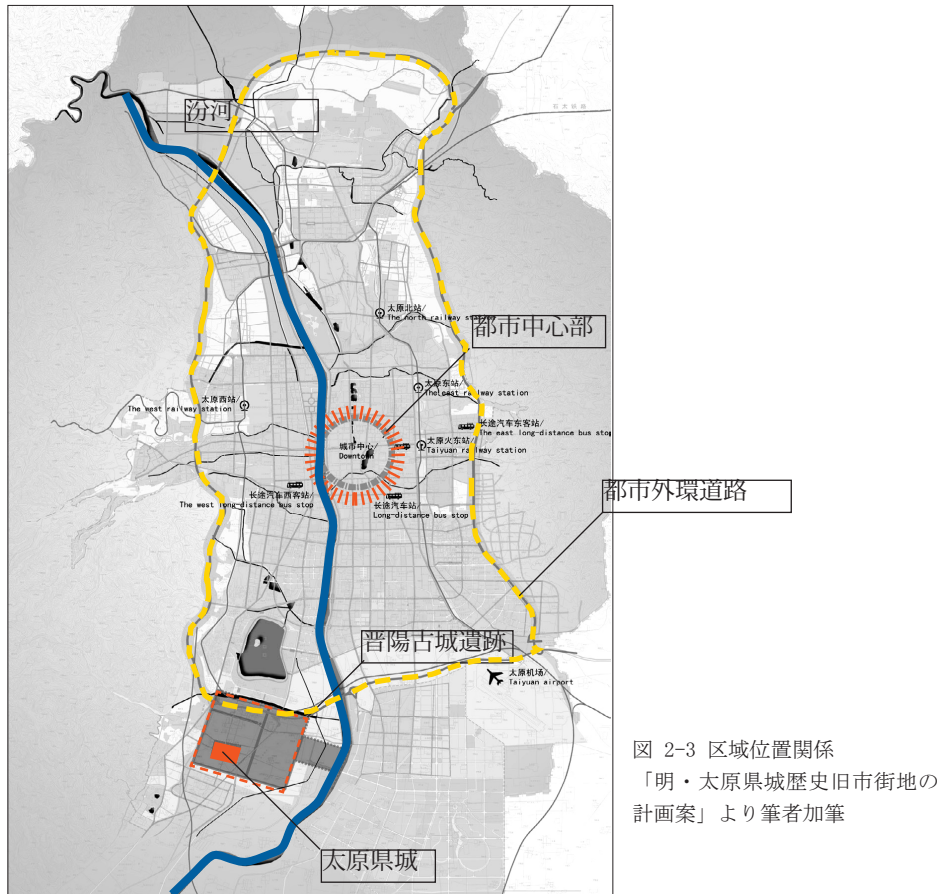


図 2-3 区域位置関係
「明・太原県城歴史旧市街地の計画案」より筆者加筆

図2-3にみるように、現在の太原県城は太原市中心の西南方面に位置し、汾河に沿い、太原市区外環道路に接し、むしろ都心地区と離れている状態である。ただ、現在行っている太原市都市整備の計画より、開発の中心地域が南部へ移動しつつ、新技術開発区や住宅地が建設されていることが分かった。

(2) 太原県城と周辺歴史文化財



図 2-4 周辺文化財と太原県城の関係
「明・太原県城歴史旧市街地の計画案」より

図2-4より、太原県城がいる場所が歴史的な文化財が多い環境である。その南、重要国家文化財「晋祠」があり、西の山の所で、大量な石窟、古い墓などが発見され、それぞれが大切に保護されている。

調査より、県城において、復元計画の元々の趣旨は観光資源として改修され、明・清時代の町並みの雰囲気を再現しに行くという提案がある。こうしたら、当地の都市計画機関に地域ごとに完全な観光システムを形成できると予想された。

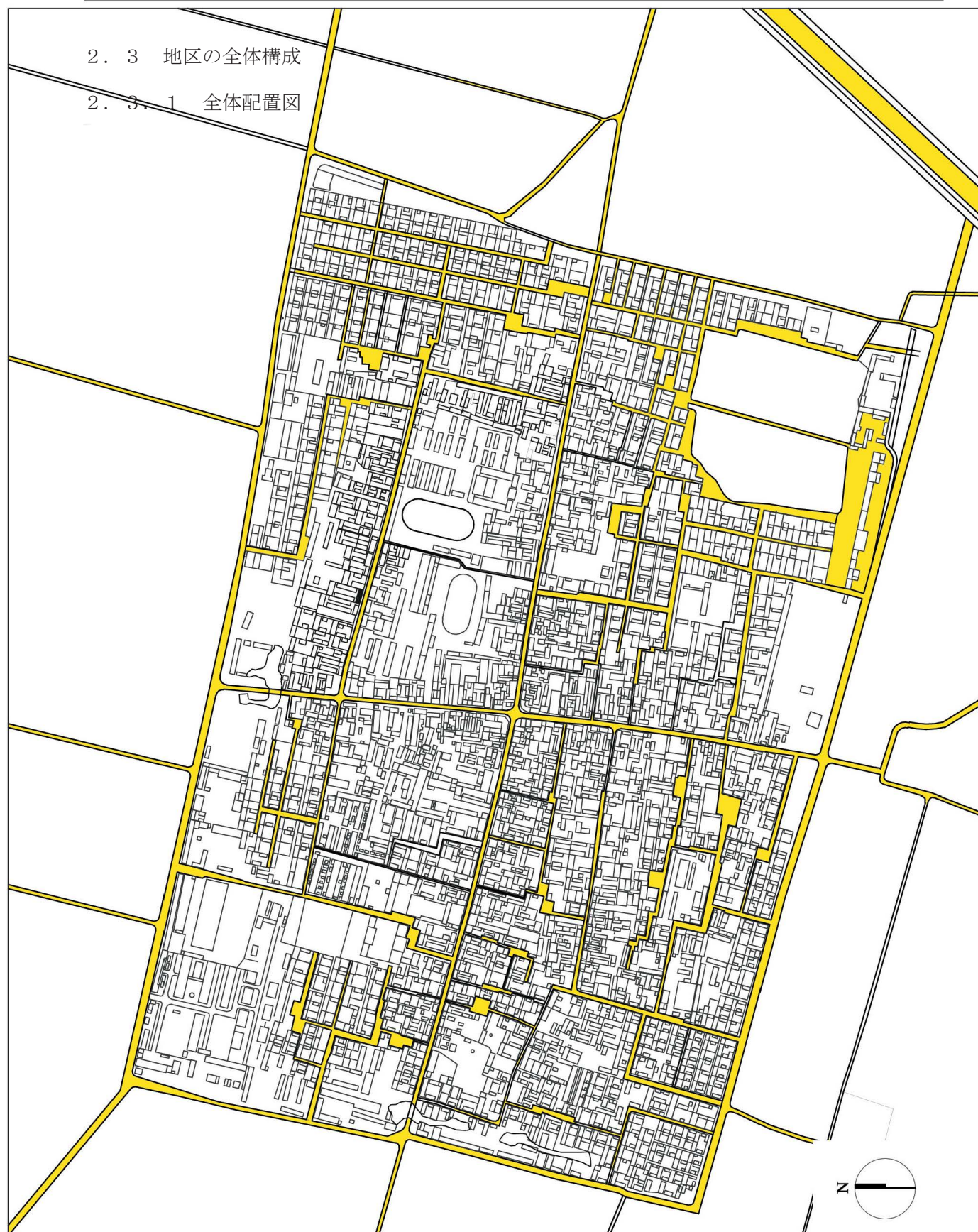


図 2-5 全体配置図

太原市測量設計院から配置図より筆者作成

2. 3. 2 機能関係

機能構成から見ると、太原县城内住居の機能と主して、約県内総面積の80%以上を占めている。現存文物遺跡（お寺など）8カ所があるが、バラバラに分布されている。また、医療、行政、文化、産業の施設があり、外部に依頼することが少なく、独立的な生活システムとなっている。

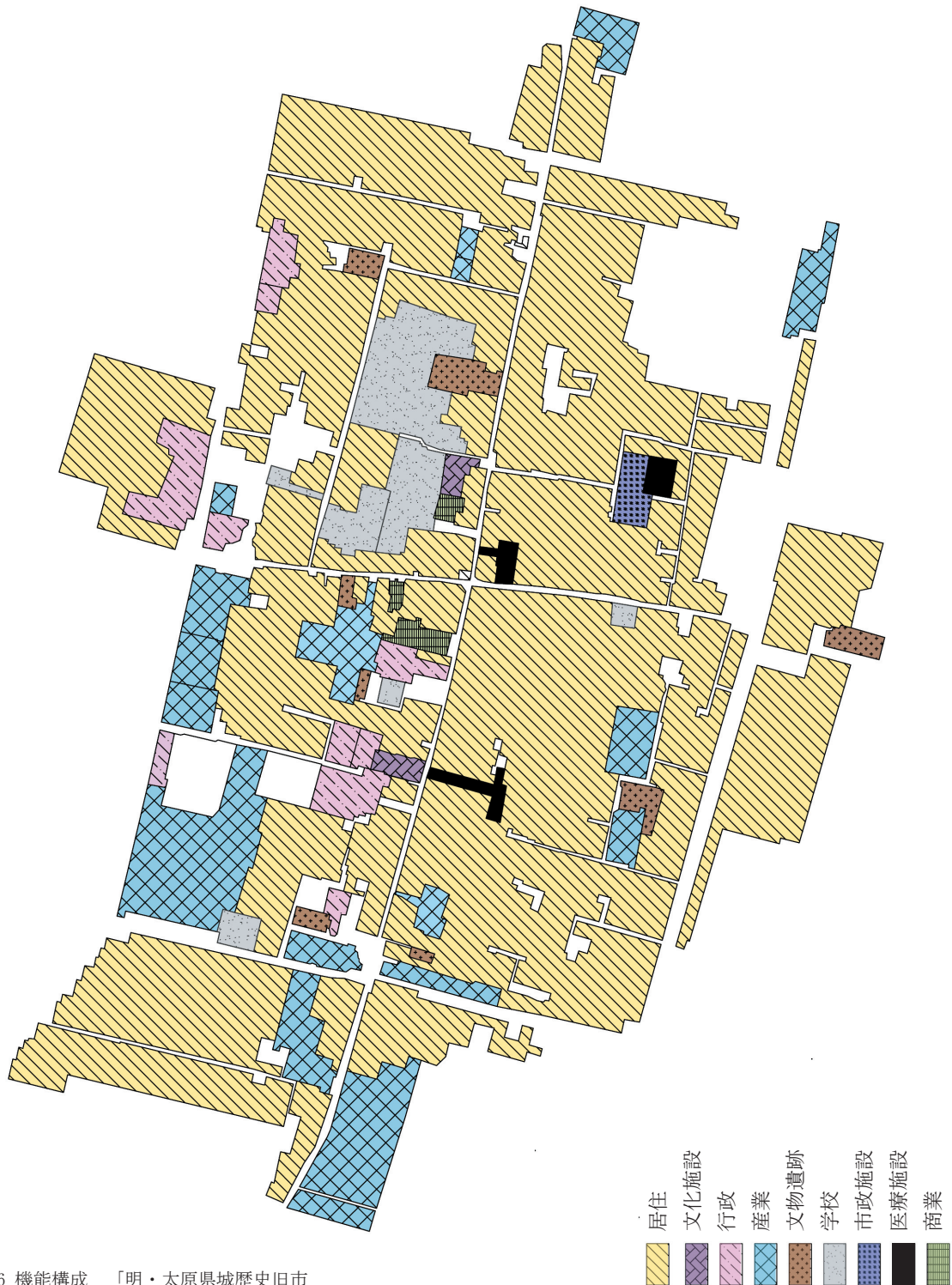


図 2-6 機能構成 「明・太原县城歴史旧市街地の計画案」より筆者作成

2. 3. 3 基本構成



図 2-7 基本構成

(1) 城壁、城門

①	北の城門	幅4m、奥行き17m、高さ4.4m があり、門額に「徳化」を書かれている。	
②	西の城門	西の城門は幅4m、奥行き17m、外部高さ7.2m、内部4.1mあり、門額に“望翠”を書かれている。現存して連結する城壁の長さ38m、高さ11mである。	2004年秋、この城門を補修した。
③	西北部残った城壁	長さ35m、幅9m、高さ9.3m	
④	南の城門部、残った城壁	長さ22m、幅7m、高さ8.2m	
⑤	城壁の周囲の堀	一部が残っている。長さ78m、幅6m、深さ1.3m	

写真 2-1 城門と城壁

A	B	E	F
C	D	G	H



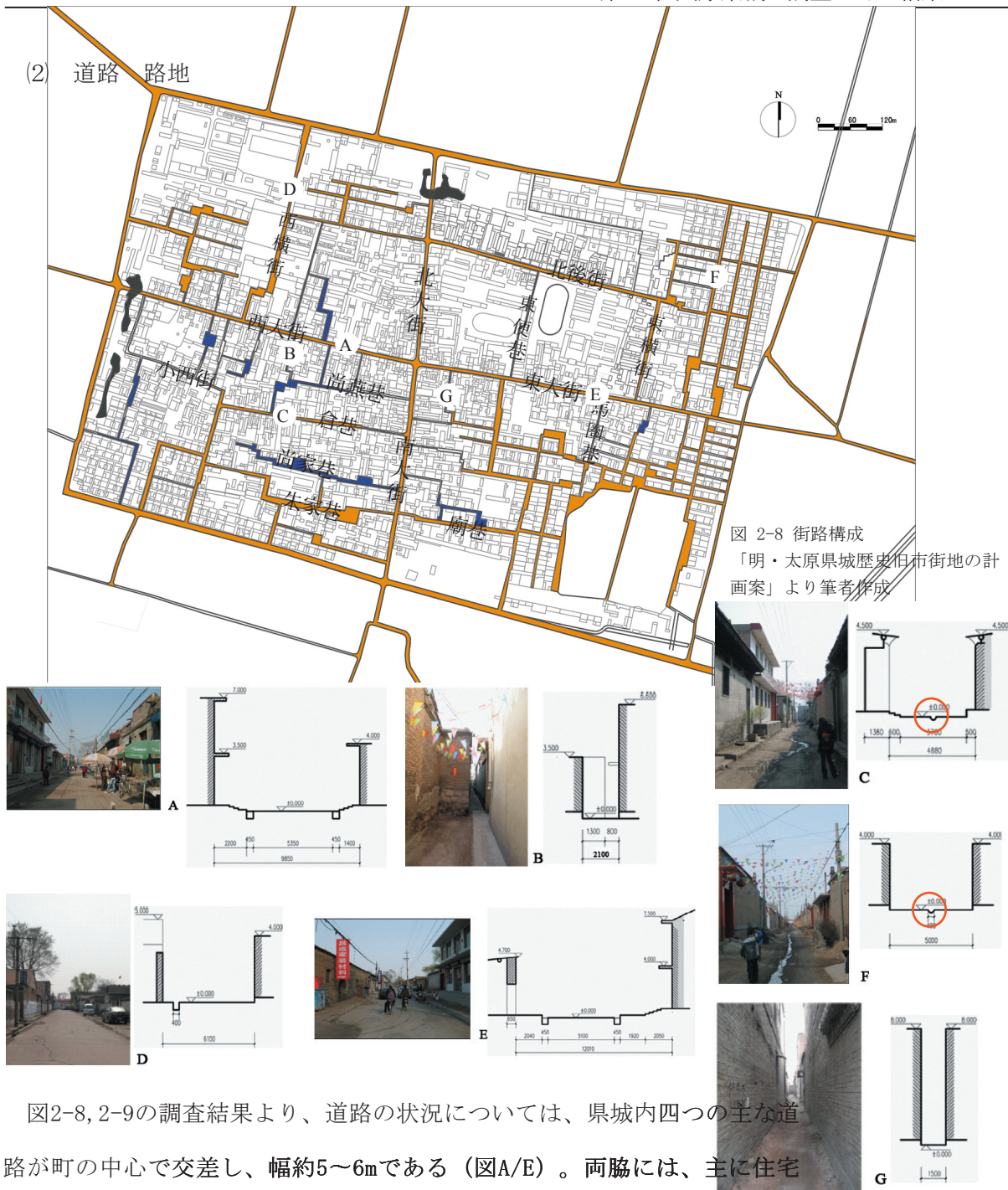


図2-8, 2-9の調査結果より、道路の状況については、県城内四つの主な道路が町の中心で交差し、幅約5～6mである（図A/E）。両脇には、主に住宅や商業店舗が並んでいる、現在もさらに修復されている。中の路地が最小約1.5mであり（図G）、他はほとんど3～4mの幅を持っている。昔馬車の幅によって作られた通路と聞いたが、排水システムがあまり付いてなく、路地の真ん中に水が流れているとよく見える（図C/F）。また、自動車が増えているから、交通渋滞がよく発生し、駐車場などの整備も非常に求めている。

歴史的な建物の基本状況		保 護 状 況	良い地区	19,314m ²
総面積	52,314m ²		やや良い地区	13,000m ²
公共建築	7,031m ²		大部壊れた地区	20,000m ²
四合院住宅	45,283m ²			

2. 4. 太原県城いる地域の四合院住宅

2. 4. 1 「四合院」の概説

中国では、どこへ行っても、中庭を建物で取り囲むかたちの四合院住宅がある。北から一番南の都市まで、中国の中で人口を大多数を占められている漢族が、数千年間この四合院住居で暮らしてきた。

① 分布

一般的に「四合院」というと、ほとんど「北京四合院」が連想され、また、北京の典型的な街路「フートン」も連想されるだろう。しかし、各地域の歴史や文化の違いより、四合院という住宅のかたちと空間構成などは異なっている。

② 類型

四合院の意味は、簡単にいえば、四つの建物が一つ中庭を取り囲むという単純な基本構成のことである。「合」は日本語でも中国語でも合わせるの意味がある。「四合院」という文字は「天地人合」という望みを表している。

「合院式」の住宅なら、四合院だけではなく、三合院もあり、これは広域に存在し、庶民の最も普遍的な住宅である。また三合院は独立の形式ではなく、四合院の簡略的なモデルである。

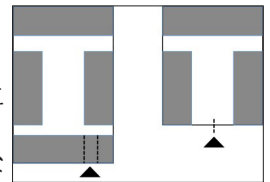


図 2-11 四合院と三合院
筆者作成

③ 構成

四合院の基本構成は、一つの中庭プラス四つの建物という基本的なユニットを縦横につなげ、鉛直の方面へは階数が増え、どんどん規模が拡大して行く。都市において、フートンのような街路に自然的にうまくできている。上空から見ると、ところどころに中庭の穴があり、単調でも、ある程度の秩序を守りながら、チェス盤のような都市をつくっている。中国において、住宅と都市の構成はある程度の社会的な価値観に左右されている。その理由は主に儒教の思想が長きにわたって人々の活動を規制し条件づけてきたからである。家族内の序列と場所の序列とを秩序づけるのに利用されてきたのが四合院中の方位である。北を最上位とし、東、西、南の順に序列づけられるという原則は広く普及されている。簡単にいうと、四合院住居は秩序化された空間として建てられているものである。

④ 地域性

四合院住宅は、質素な住まいであれ、宮殿であれ、あるいは歴史のある寺院であれ、遠い過去から現代にいたるまで、共通する明らかな特徴をもっている。地域ごと、歴史的、民族的によって多様な形態が伝えられてきたが、それでも共通の伝統が覆いかくされるほどではない。地理条件、歴史の背景、生業類型、そして民俗の特徴などに基づく地域文化の固有性が住宅のかたちに大きく影響し、その地区共通の特徴を現れている。ただし、同じ地域でも、家族構成、経済状況が異なるため、差異も存在する。

2. 4. 2 太原皇城地域の四合院の特徴（北京四合院との比較を通じて）

太原皇城は山西省中部の晋中地区に位置し、その四合院は北京の例と同じく、中国華北地区の四合院類型に属するが、それらの間には様々な差異がみられる。また、省内各地区の四合院かたちも異なっている。一般的に、北京の四合院はよく知られているので、ここでは、両者の比較を簡単に行う。

山西省の四合院の基本的な特徴は、西部黄土高原の住宅の特徴が見られる。たとえば、

- ①敷地の選択がもっと自由に行い、周りの塀が高くなる。
- ②中庭は南北の方向に長く伸びに行く。
- ③母屋は2階～4階で建てられる場合もあり、屋根は片流れ造りのものが多い。
- ④ドアと窓などアーチが着いてある様式が西北横穴式住居に似ている。

一方、北京の四合院形式は、各棟が四角い中庭に面して建っており、南面する方向性、明確な軸線、そしてバランスのとれた左右対称性を備えている。宅地の40%の面積を占める中庭とそれに続くオープンスペースは敷地面積全体の大部分を占め、住まいのどの部屋よりも広い。住まいは中庭を囲んでつくられる。狭い廻廊をもつ平屋住宅であり、廻廊は各棟を連絡する屋根付廊下の機能を果たしている。

それぞれの四合院は外部の街並みがある小路(胡同)にリンクされるとともに、有機的なシステムを形成している。また四合院の配置は中国昔の宮廷のプランにも通じるものである。

	山西省晋中地区	北京市
地理の位置	<p>共通点： 両者は中国の華北地区に立地する。内陸地区として、乾燥、雨が少なく、両地とも水不足が深刻になっている。</p> <p>相違点 華北平原の西、黄土高原の東部に位置し、地形は山地、丘陵、盆地、平地などがあり、山西省政治、経済、文化の中心地である。海拔平均1000mぐらいである。</p> <p>華北平原の西北端に位置し、東、西、北部地区が山に接しており、南部以外は山に囲まれていて全市域の約62%を山地が占めている。中心市街地はこうした山岳地域に囲まれた盆地の中にあり、海拔が平均20～60mである。</p>	
四合院の空間構成	*図面を後P31～に添付する	
	敷地	<p>各戸主の経済条件により比較的自由に敷地を選定し、様々な人が様々な敷地を利用することを可能である。(図2-12, 2-14, 2-15)</p> <p>一般的に、官吏の自邸として、敷地割りに厳しい制限がある。元朝(1271年～1368年)この都市をつくる際に、街区はほぼ70m×70mの正方形で分割され、住宅の敷地間口がおおよそ35mになっていた。(図2-13)</p>
	平面配置	<p>基本ユニットが正房、廂房、倒座、門とで構成され、一体感が強く、軸線、シンメトリーの原理を守っている。狭くて長い庭を中央に配置され、両脇には廂房が並んでいる。(図2-16)</p> <p>基本ユニットが正房、廂房、倒座、耳房、門とで構成され、シンメトリーのよいバランスが感じられる。</p> <p>中庭は正方形の傾向にある。</p> <p>巨大な四合院群となった一つ家族の邸宅の事例が多い。(図2-18, 2-19, 2-10; 写真2-2, 2-3)</p> <p>家族の等級地位が表れるため、各棟の高さで、地位がよく分かる。(図2-17)</p>
	立面の構成	<p>西部アーチ型ドアが付いており、各棟主体(正房、廂房)は耳房と一体になっている。柱間は、正房5間以下(3間ぐらい)が主流である。(図2-21, 写真2-4)</p> <p>宮廷式飾り。適度な寸法がとられている。各棟主体(正房、廂房)と耳房に高差があり、一体的ではない。柱間は普通に3～5間、王室はもっと広くなる。(図2-22, 写真2-5)</p> <p>外壁はもっと閉鎖的で、高くて、固くものが築かれている。</p> <p>外壁は特に防御性を表現しない。</p>
	断面の構成	<p>院門から入ると、地勢の高さがゆったりと上がっていく。庭と庭の間に、通路とする部屋(過庁)を設置され、それで空間を分けている。</p> <p>各院の地勢は水平に保持され、正房の奥行きが長く、特別に重視される地位を表れている。</p> <p>屋根は片流れ造りが多く、また正房の屋根は平らになっている。(図2-23)</p> <p>屋根は切妻が普段である。(図2-24)</p>
その他	<p>中国の伝統礼法などをよく守る性格があるため、住宅の形も本土的な特徴が鮮明である。</p> <p>西洋文化と本土文化の折衷様式を多用している。</p>	

表 2-3 四合院の比較

● 敷地配置の比較

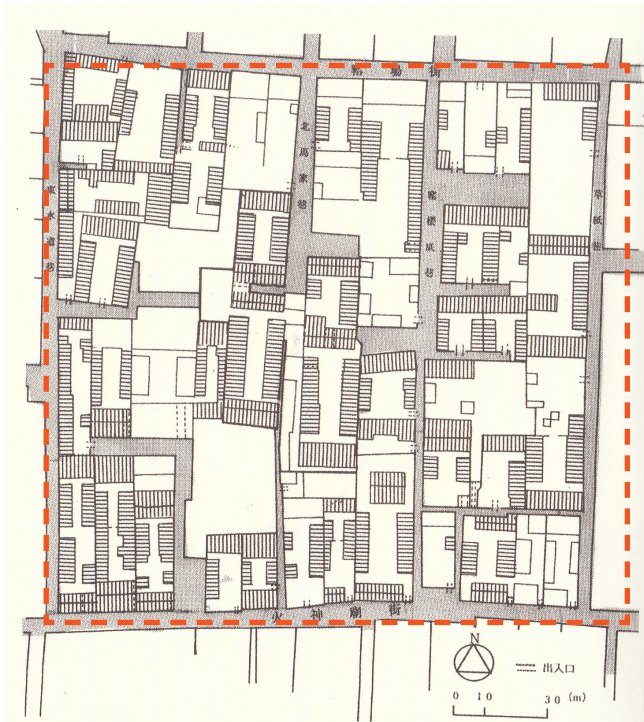


図2-12 山西省平遙の街区：敷地の自由に分配され、一つブロックが奥行きが長いである。「アジアの都市住宅」より筆者加筆

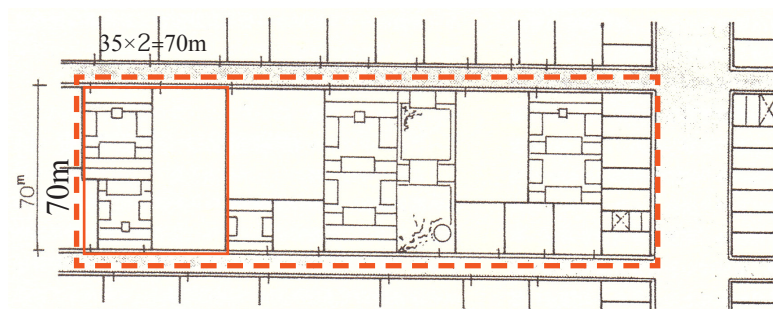


図2-13 北京の街区：一つブロック70m×N*70mほぼ長方形のかたちで、奥行きはうまく決まっている。「アジアの都市住宅」より筆者加筆

太原県城の街区-I

図 2-14 筆者作成



太原県城の街区-II

図 2-15 筆者作成



● 平面の配置の比較

山西省中部地区典型的な二進四合院

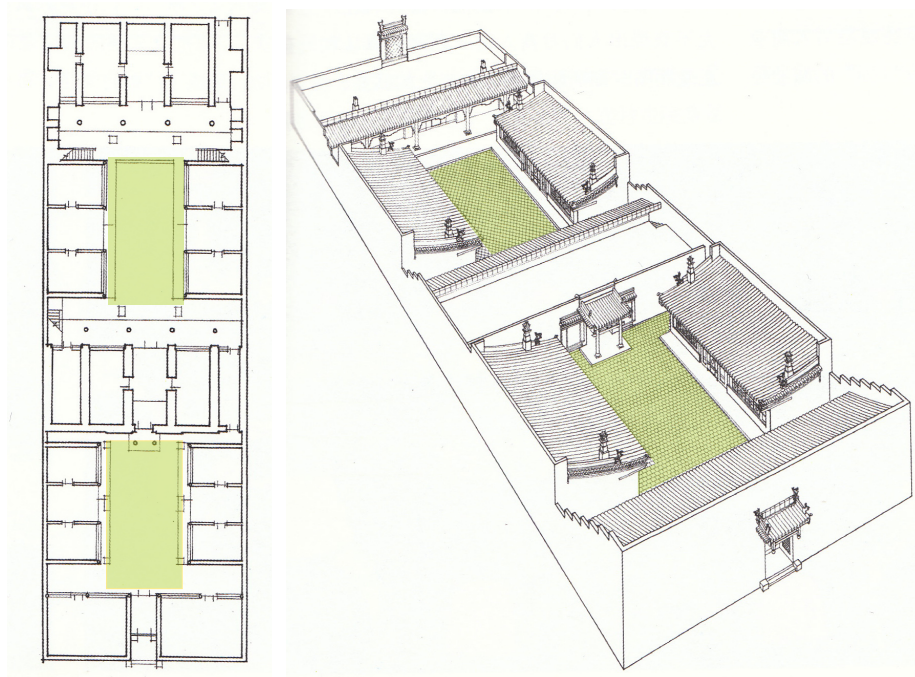


図 2-15 「山西民居」より筆者加筆

典型的な北京四進四合院

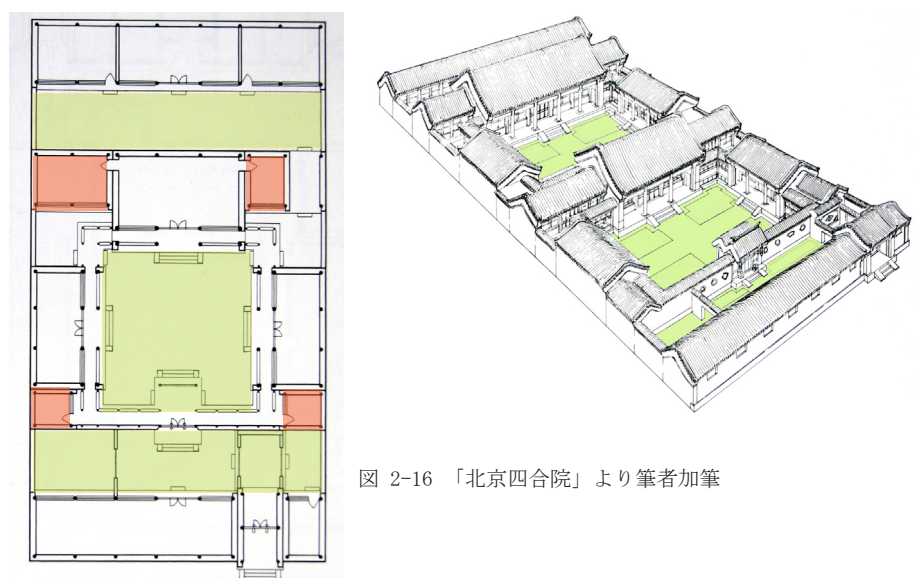
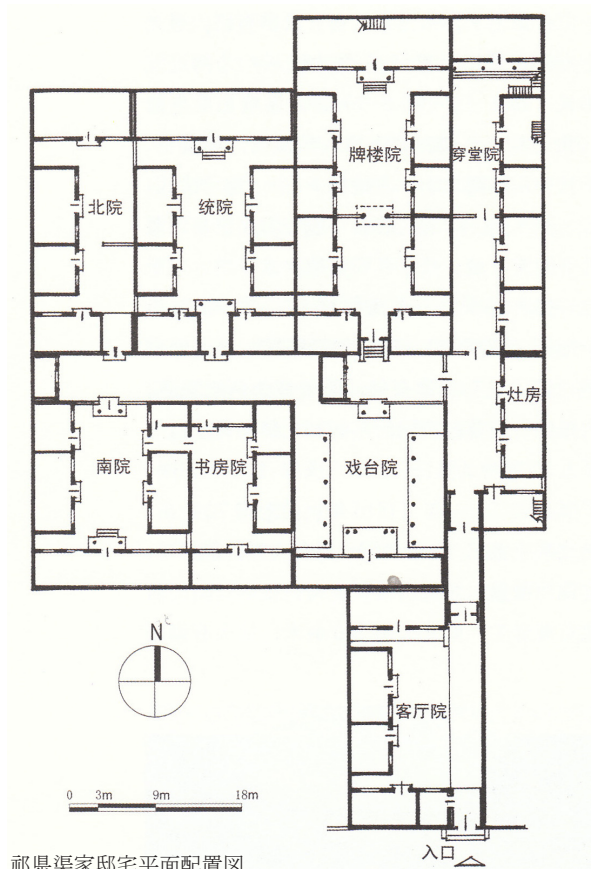


図 2-16 「北京四合院」より筆者加筆

● 晋中地区四合院群の事例



祁県渠家邸宅平面配置図

図 2-18 「山西民居」より

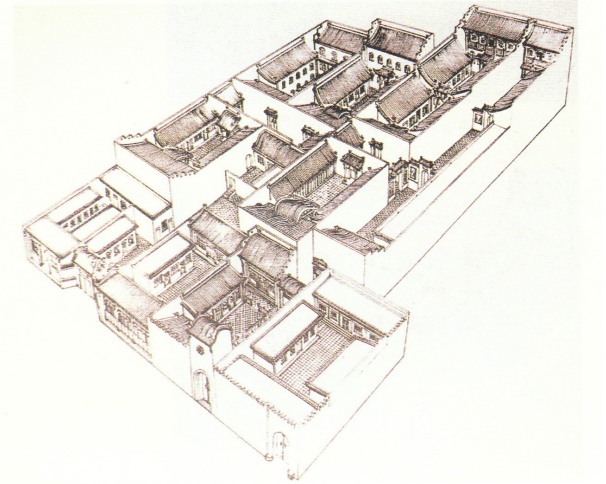
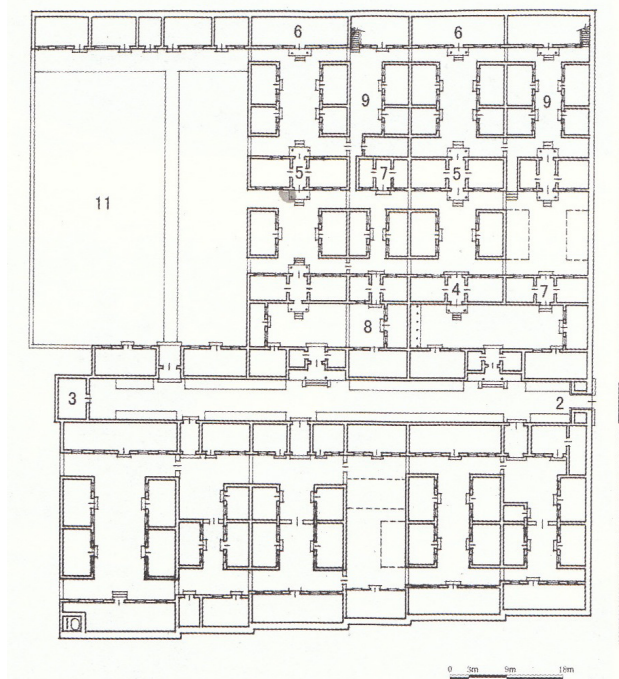


図 2-19 「山西民居」より



祁県喬家邸宅平面配置図

図 2-20 「山西民居」より

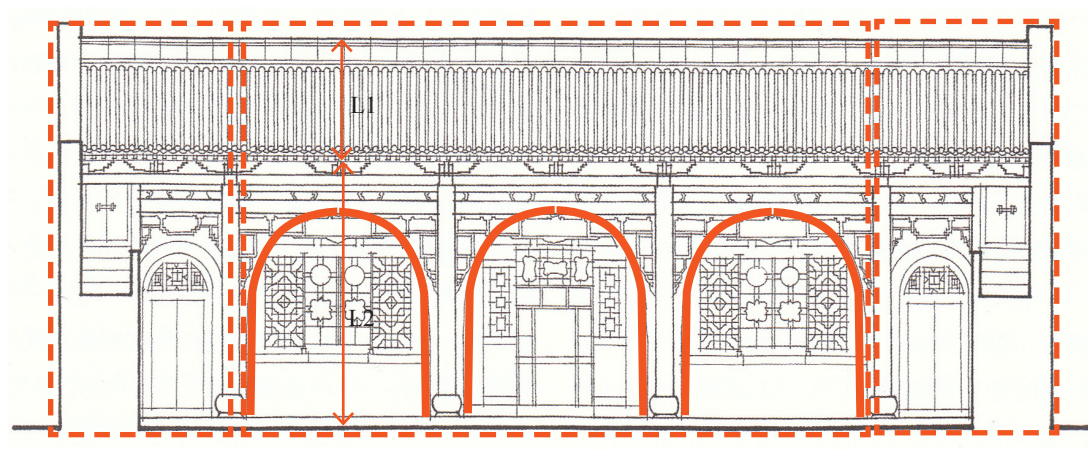


写真2-2 祁県喬家邸宅
「山西民居」より



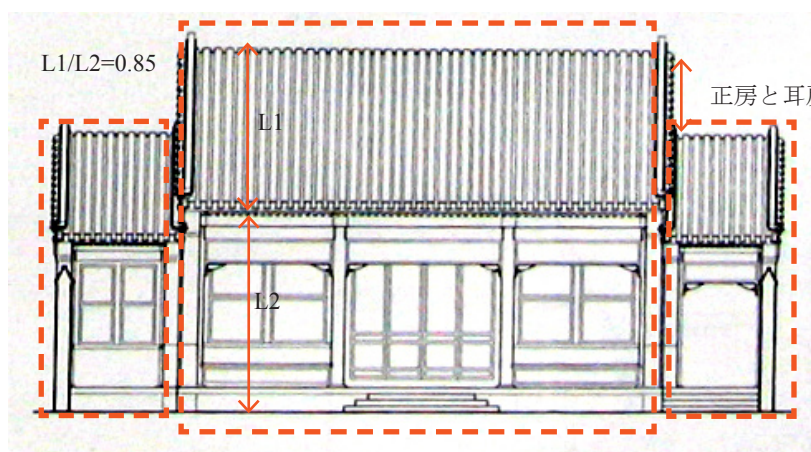
写真2-3 祁県喬家邸宅（院内）
「山西民居」より

● 立面構成の比較



$$L1/L2=0.46$$

晋中地区典型的な二進四合院
図 2-21 「山西民居」より筆者加筆



$$L1/L2=0.85$$

典型的な北京四進四合院

図 2-22 「北京四合院」より筆者加筆



写真2-4 晋中地区王氏邸宅 筆者撮影 2007. 5



写真2-5 北京南鑼鼓巷にいる四合院 筆者撮影 2005. 10

● 断面構成の比較

図 2-23 晋中地域の二進四合院の断面
「山西民居」より筆者加筆

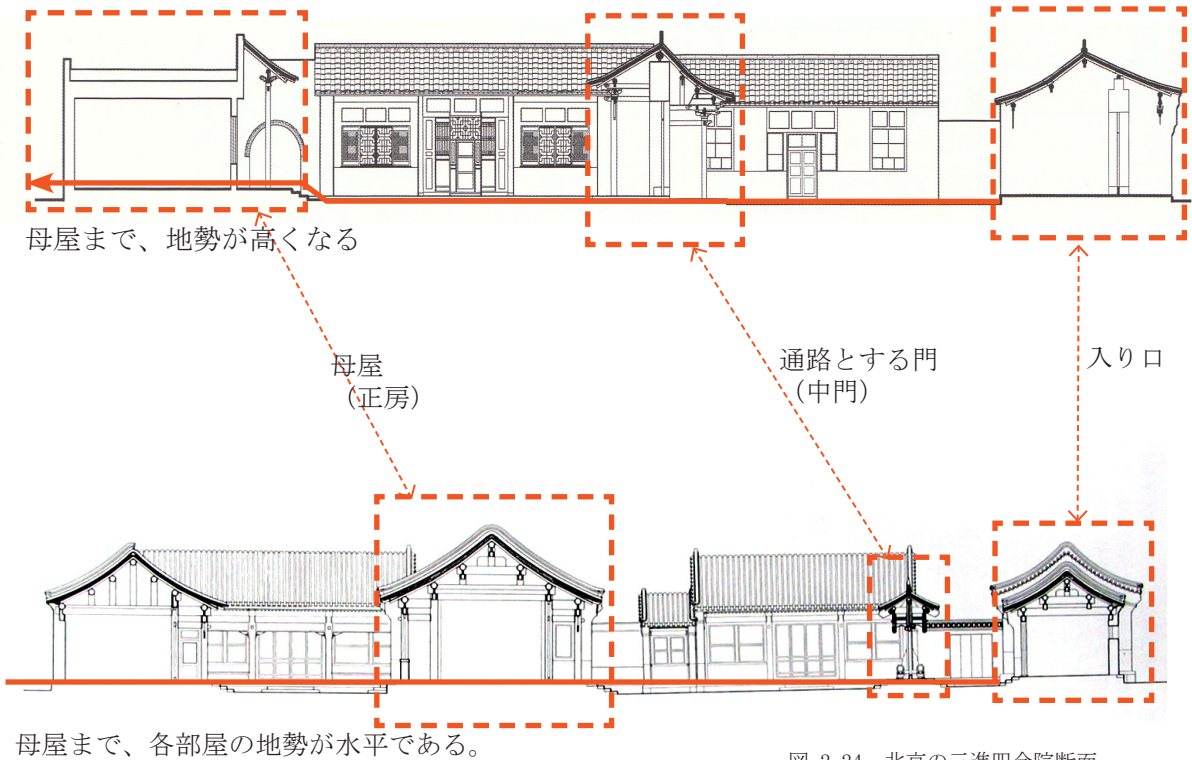


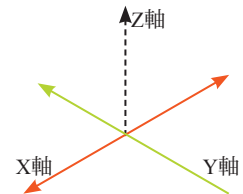
図 2-24 北京の三進四合院断面
「北京四合院」より筆者加筆

2.5 太原县城における、四合院の空間形態の特質

2.5.1 空間形態の分析方法

空間形態の分析を行うため、先ず地区に現存している四合院中典型的な幾つのケースを選択し、様々な四合院平面図から、基本ユニットを確定して、さらに、その並列方向（X軸）、序列方向（Y軸）及び鉛直方向（Z軸）への構成を図式化する。

次に、比べに行ける構成要素の抽出を行い、例えば、①入り口（院門）、②内部空間-1（中門）、③内部空間-2（中庭）、④内部空間-3（室内）、⑤ディテールなどといった5つの項目を設定し、その要素によって、構成された空間の特質を導出する。

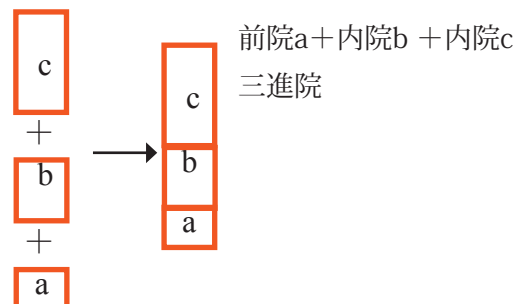
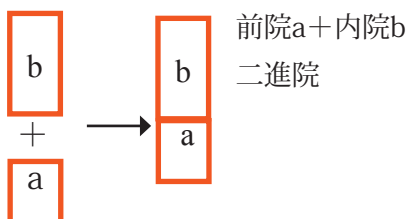


2.5.2 平面構成の図式

●並列方向へ（X軸）



●序列方向へ（Y軸）



●X、Y軸への組み合わせると、以下の典型的な平面から、その図式ができている。(図2-25)



図 2-25 筆者作成

2. 5. 3 構成要素特質

(1) 四合院住宅の入り口（院門）

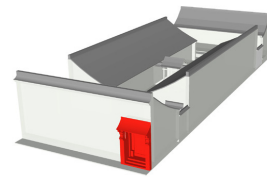
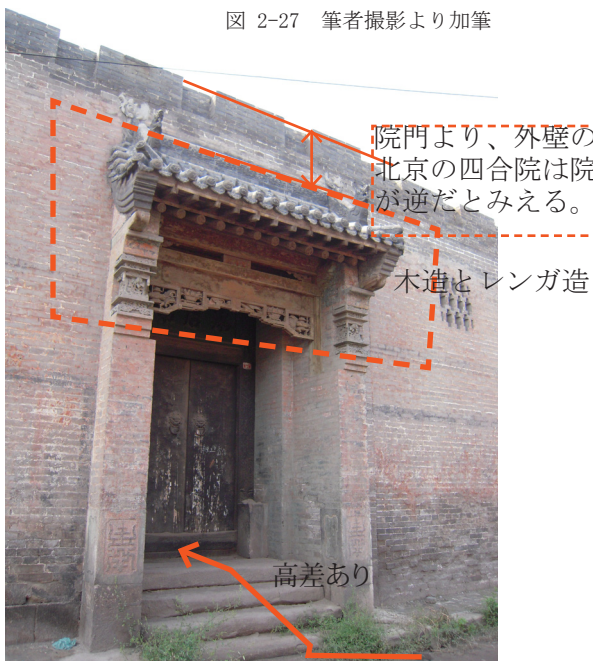
院門の形から、家長の身分や地位などが分かるため、四合院を造る時にこの部分が一番大切な場所である。

●種類：太原県城内の四合院の院門が大幅に2種類があり、レンガ壁式と家屋式といわれる。

図 2-26 筆者撮影より加筆



図 2-27 筆者撮影より加筆



① レンガ壁式(図2-26, 2-27)

一般的に四合院の東南に位置し、平面の中心線に位置する事例もあり、三合院の場合(図2-28)で、この形がよく使われる。

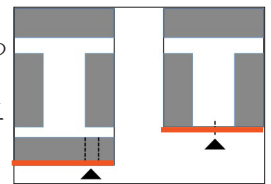
図 2-28 院門の位置
筆者作成

写真2-6 北京の典型的な四合院の院門 筆者撮影2005. 10



図 2-29 筆者撮影より加筆

② 家屋式 (図2-29, 2-30)

四合院の東南、或は平面の中心線に位置し、奥行きが深く、一つ部屋のような空間を形成できる。

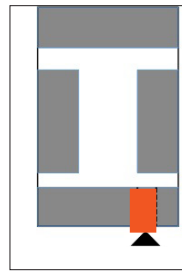


図 2-31 家屋式院門の位置
筆者作成

●意匠的特質



図 2-30 筆者撮影より加筆

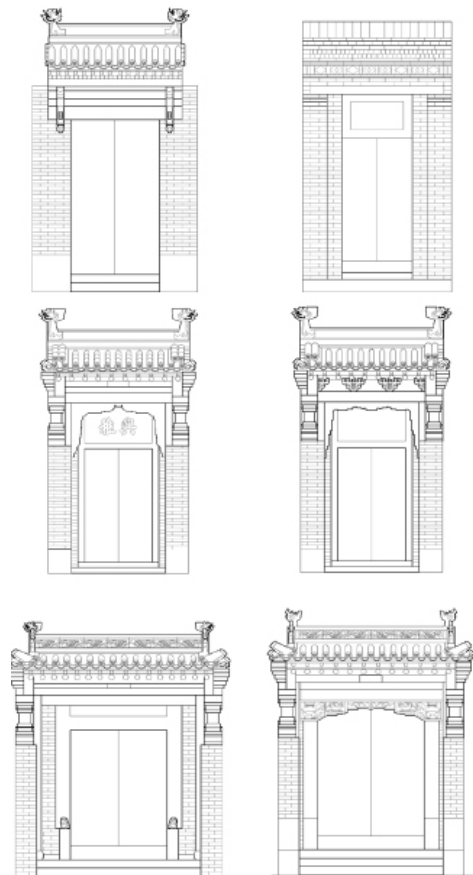
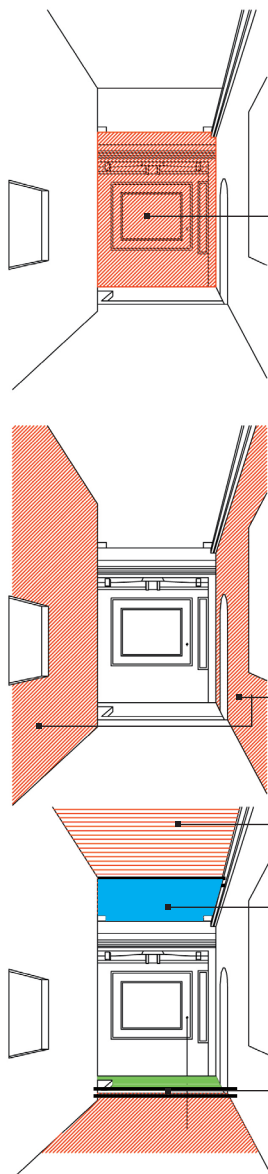


図 2-32 「明・太原県城歴史旧市街地の計画案」より

● 入り口の空間形態

図 2-33 入り口の空間形態
筆者作成



影壁： 院門を入った所にある目隠しの塼

風水のため、入り口から直接に内部の風景をみえないことが四合院住宅の共有な特徴の一つ。

入った瞬間の圧迫感を感じれる両方の壁

屋根があるため、入り口空間が一般的に暗いになっている。

入り口空間と院内の空の境界線

入り口空間と四合院内空間の境界線、下り石段となっている。



写真2-7 入り口空間
筆者撮影2010.9

●「影壁」視線の制限と「神龕」（ほくら）の設置

置く場所により、「影壁」の類別

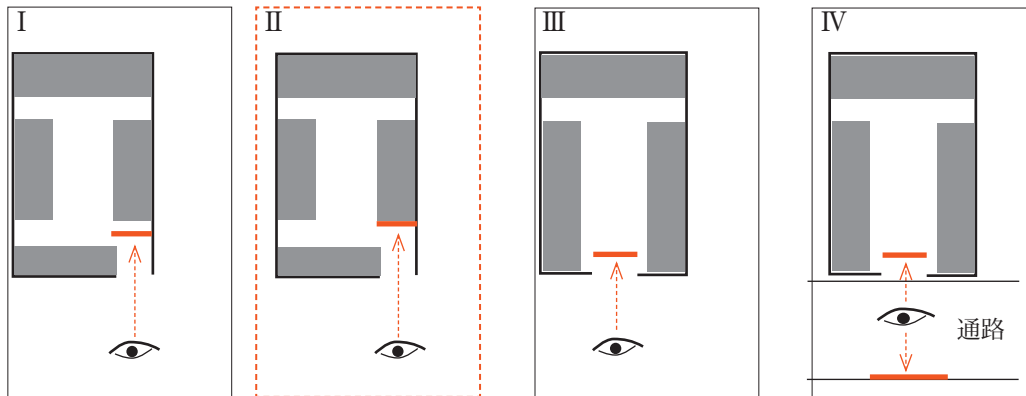


図 2-34 筆者作成

- I： 建物と分離し、独立で存在する。
 II： 建物の壁と一体になっている。太原県城内、この型が普遍的である。
 III： 三合院の場合、庭の中心線に位置し、独立 存在する。
 IV： 時々貴族の邸宅の入り口前にまた一つの「影壁」があり、両方の視線を制限する。

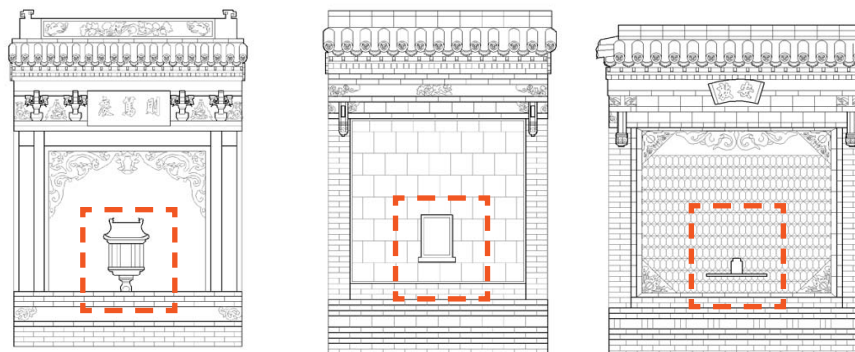


図 2-32 「明・太原県城歴史旧市街地の計画案」より筆者加筆



写真2-8 入り口の祠a
筆者撮影 2010.9



写真2-8 入り口の祠b
筆者撮影 2010.9

太原県城の四合院住宅において、特質あるのはその「影壁」の上に、「神龕」（ほくら）をおいてあるとよく見える(図2-35)。これが北京と区別して、山西省の四合院の特徴を表れる。そして、住民たちが家族の重視、神様の信仰など地域文化をよく反映している。

(2) 四合院住宅の内部空間-1（中門）

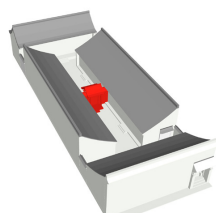
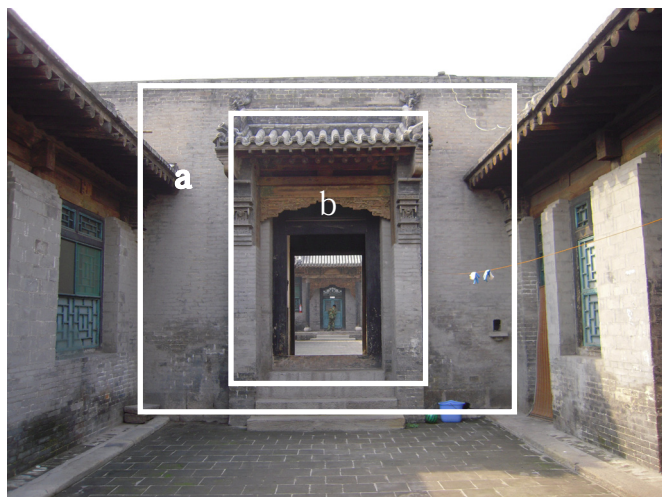


図 2-36 筆者撮影より加筆



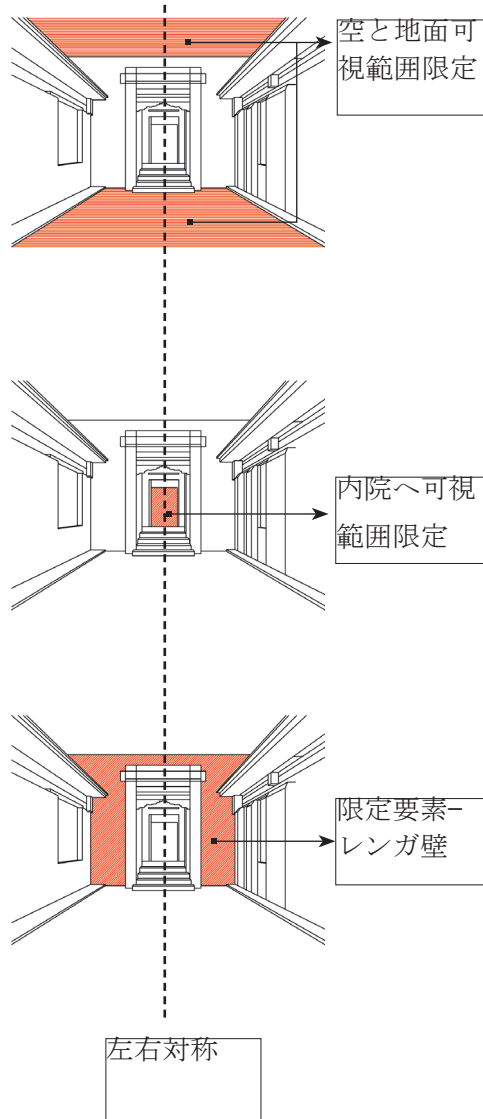
①レンガ壁式

高い壁と真ん中の門a+bと組み立て、外院と内院空間を区別する。

図 2-37 筆者撮影より加筆



図 2-38 中門までの内部空間形態



②垂華門式（家屋式）

低い壁と真ん中の門a+b+aと構成され、外院と内院空間を区別する要素となっている。

(3) 四合院住宅の内部空間-2 (中庭)

太原県城で存在する住宅は北方四合院、また三合院の類別に属し、二進院と三進院の平面で構成されている。外部から見ると、閉鎖的な形で、内部は別天地のようである。中国伝統的な封建文化と儒家の礼制を反映している。

ここで清代から残った四合院が多く、倒壊しそうな空家も結構あるとみえ、調子がやや良い住宅が、また使われている。ただ、危ないので、住みにくいとよく聞いた。

北京の四合院と比べると、中庭の現状が逆と見える。

北京の場合は、人口が増えるため、四合院の庭に幾つの別棟を増築することが多く、混雑的な「大雑院」と形成され、中庭の面積が減少しつつあった。

太原県城には、元々人口がそんなに多いではなく、四合院内、建物がどんどん壊れていたとともに、人口も減少し、残っている住民たちできる限り使えそうな部屋に暮らしている。

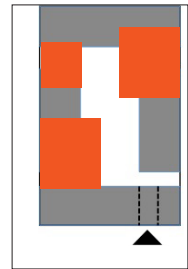
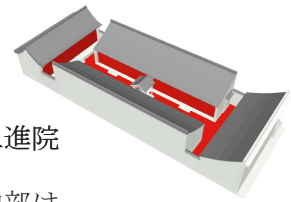


図2-39 北京：増築の場合
中庭面積が減少される。
筆者作成

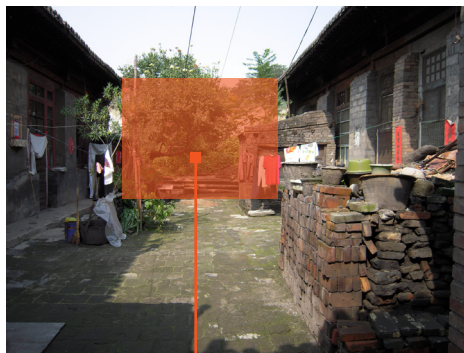


図3-41 母屋の倒壊 筆者撮影より加筆

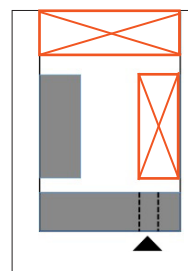


図3-40 太原：建物が減少する場合、中庭が広がっている。
筆者作成



写真2-9 中庭a 筆者撮影 2009.9



写真2-10 中庭b 筆者撮影 2009.9

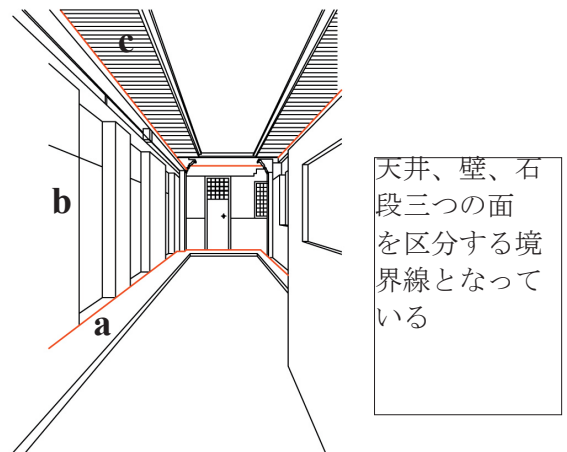
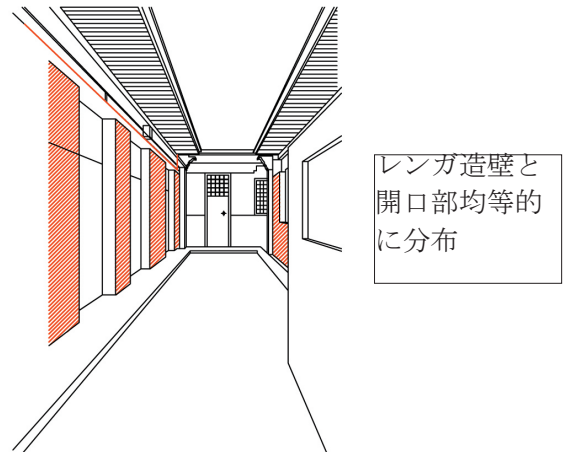
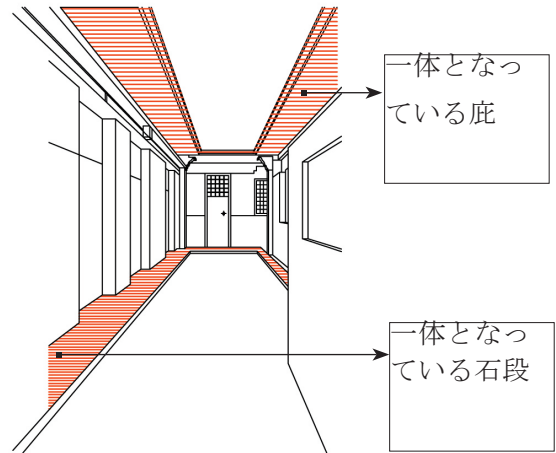


写真2-11 中庭c 筆者撮影 2009.9



写真2-12 中庭d 筆者撮影 2009.9

図3-42 中庭の空間形態
筆者作成



(4) 四合院住宅の内部空間-3（室内）

調査中、ある高齢の婦人が一人暮らす四合院住宅を訪れた。85年間住んでいたが、その家族変遷とライフスタイルの変化に伴って、使用空間も柔軟に変わっていたと見て分かった。



写真2-13 寝室a 筆者撮影 2009.9



写真2-14 寝室b 筆者撮影 2009.9



写真2-15 貯蔵室 筆者撮影 2009.9



写真2-16 貯蔵室 筆者撮影 2009.9

(5) ディテール

① 外壁

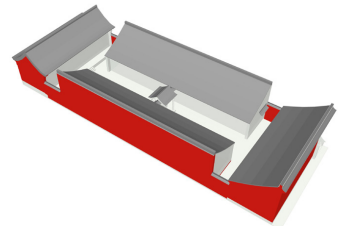


図3-43 筆者撮影より加筆



図3-44 筆者撮影より加筆

- かたち： 片流れ造りと切り妻造り 自由曲線の応用
- アーチの開口部の設置



② 舗装



写真2-17：元の四合院中庭内のレンガ敷きの舗装 筆者撮影より加筆



写真2-18：改修された北大街の舗装 筆者撮影 2009.9

③ ドアと窓

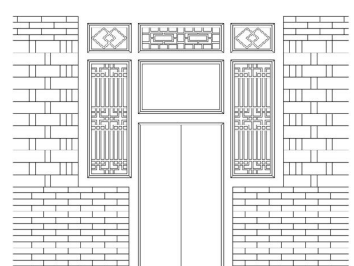
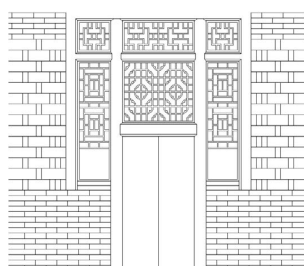
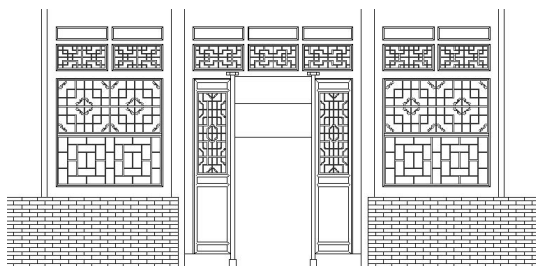


図3-45 「明・太原県城歴史旧市街地の計画案」より

木材と透明な紙で造られ、図案パターンは明・清時代の様式をよくわかる。

2. 5. 4 まとめ

現地への調査では、ヒアリング、スケッチ記録、実測、と写真撮影などにより、太原県城内の四合院住宅の空間形態の特質を記述した。

最初の段階は、一つ一つの具体的な四合院住宅の配置図を描くことではなく、複数の平面図から基本モデルや組み合わせる原理の注目した。さらに、具体的な形から図式化にした。各基本ユニットがX軸（並列）、Y軸（序列）方向への並置、連結、またZ軸（鉛直方向）へ段階の増加などは四合院体系の構成原理である。

次の段階は構成要素の抽出を行った。確定した構成要素は、①入り口（院門）、②内部空間-1（中門）、③内部空間-2 中庭、④内部空間-3 室内、⑤ディテールなどといった5つの項目である。その自己同一性を整理したうちに、他と相違する所々も明らかになった。

調査結果として、県城に現存している四合院住宅の形態上の特質を明らかにした。

2. 6 現地調査に対する取り組みの聞き取りとその課題

2. 6. 1 王金平氏への聞き取り

時間：2010年8月26日午後4時半～6時

場所：太原理工大学建築学実験中心

内容：

●リュウ：研究テーマは山西省の民家保護についてですが、特に太原県城中に残っている民家の再生方法などを検討していきたいと考えています。研究計画をご覧いただきたいのですが、修士論文になれるでしょうか。

オウ：山西省は「晋」と略称され、民家と言えば、晋北民家、晋西民家、晋中民家、晋東南民家、晋南民家、5種類があり、地域によって形の差異がよくみえます。太原市は晋中地区に位置し、民家は晋中四合院に属します。

正直なところ、研究している「太原県城」は典型性がちょっと弱いと思います。ただ、研究の目的や意味など問題がないとよく分かりますし、僕の意見は、その県城だけじゃなくて、県城存在している太原市から広い範囲から説明するのはいかがでしょう。

●リュウ：太原市は普通の都市だと、四合院民家を代わりに、高層ビルなどどんどんできたですね。

オウ：ただ、あなた研究している民家の保護や再生手段などは、この大きな都市と背景すれば、もっと面白いかもしれないかなあ。例えば、昔北京は「皇城」、太原は「王城」ですよね。太原歴史から、昔の軍事要塞として作られた場所ですが、防御のため、「丁」字型の道路がまだけっこう存在し、住居の形態は「前店後宅」があります。この民家の特徴は太原県城中にまだみえますか、もうたくさん壊されたでしょう。

王金平 略歴

1966年 山西省孝義市
で生まれ

1988年 太原理工大学
建築学卒業

1997年 太原理工大学
修士終了

1999年 太原理工大学
准教授

2005年 太原理工大学
教授

現在 太原理工大学建
築学実験中心主任

研究領域：中国伝統的
な建築文化、中国建築
歴史、民家建築など。

2009年出版した『山西
民家』の作成にかかわ
って、著者の一人であ
る。

●リュウ：そうですね、復元された建物がほとんどお寺だ、民家の住環境が非常に悪いとみえています。

オウ：我が国はいわゆる文化大革命時代に、文物が一回重大な破壊されたことがあったことを皆知っています。実は、近年以来の破壊する速さは、文化大革命よりもっと速いです。不動産の開発が速いし、お金の力も持っているですよ。民家の未来がどうなるのか、不安と感じている。これが国の国情です、古い建物を保護や再生より、高層ビルを建てるほうが安いかもしれないですね。

●リュウ：我が国はそれに対して、法律の制限がありますか？

オウ：1996年9月12日、「西安宣言」が発表され、政府からの力を集まるため、文物を管理するに関する法律を確立しました。まだ、建設部より制定した「歴史文化名城の条例」もあります。

●リュウ：山西省四合院民家の再生利用について、よい事例がありますか。

オウ：保存と再利用状況は、最も整っているものの一つである「平遙古城」ですね。（明代始めに造営された町がそのままのこっている。）その再生手段は先ず、四合院内居環境を改善するため、人口密度が減少された。古城内2／3の人たちが新しい集合住宅に転居され、元の四合院を貸し出したと、国家の責任は個人に分配することを実現できます。観光地として、明清時代の町並みの風景を旅行者目の前に広がり、四合院も保存できるようになりました。

●リュウ：そうですね。私大学時代にそこへ行ったこともありました。一日を古い民宿（四合院）に泊まって、いい体験としてずっと覚えていますよ。

オウ：もっと面白いのは、新年の際（旧暦の正月）、外国人がわざわざここに来て、四合院で何日目の伝統的生活を体験しますよ。住民たちと中国のジョーザをつくり、爆竹を鳴らして新年を祝います。そして、民俗のまつりとか、撮影の展示とか、けっこうあります。

リュウ：いいですね。ぜひ家族と行と思っています。太原市内において、事例がありますか？

オウ：民国時代王靖国将校の旧居「王公館」（1820年建）と言われる大きい四合院民家があり、近年レストランになりました。やっぱり住居の機能を完全に捨てて、大胆な試みだと思っています。僕は一回行ったことがあります、値段が非常に高い、贅沢の旅ですよ。ただ、地域飲食文化を紹介すると目指して、最初の郷土料理ばかりだったけど、益々来館者の味のお好みに合うため、現在多分どこの料理もありますかなあ。我が国では、文物がもし産業化になれないと、保存や再生は無意味になるかもしれません。

リュウ：はい。大変勉強になりました。いろいろを教えていただき、ありがとうございました。

2. 6. 2 考察

太原皇城は、歴史的と現在人為的な破壊両方をうけていたとよく見えている。その中に存在している四合院といば、典型性は直接単純にまとめにくいと感じている。形態分析する場合、そのいる地域範囲で、全体的地域特徴、また様式の同一性を把握するのは可能である。その同一性の印象に基づいて、相違点などを発見できて、地区ごとに建築形態の特質を捉える。これが二章の形態分析の方法である。

調査によって太原皇城構成及びその現状が明らかになったが、同時にその保全、再生にあたり、その問題もうきぼりになった。凍結保存か、再生活動か、もっと深く言えば明・清の封建制が刻印された町並みをどのように現代的に再生し、現代住宅の生活スタイルに相応しく再生することが果たして可能なのか。

ヒアリングより、王金平教授がその事例を取り上げて、大幅に説明した。それが山西省でよく使っている保全、再生する手段である。また、実際にこの太原皇城に対して、どうの手段がいいのか、異なる立場から、結果も同じではない。そして、現在の社会問題に対する、どうやって対応するのか、これからの幾つの課題になれる。単純に、保全のために保全するのは意味が薄く感じる。同じような手段で幾つの古城を復元するのは再生といえない。

歴史遺構に新たに対応手段が必要であり、適度な大胆に現代的な改修、再生することを提唱する。歴史的な建物に、現代社会で生きていく機会を与えるべきと考えている。

第三章 太原県城の保全・再生方法の提案

3. 1 太原京城と四合院住宅の相互依存する関係

山西省における（農村集落を除く）、四合院住宅の存在形式が大幅に分析すると、以下3種類がある。

1、四合院城塞（点の存在）

商人の自宅：ある程度の規模を持っている、大家族多世代と共同に暮らしたという邸宅である。例えば 王家大院

平面図構成 特徴：家族の城塞ような四合院群と体系化になっているかたちである。

適切と考えられる保全の方向：博物館式な凍結保全

2、商業店舗（線の存在）

平面構成：「前店後宅」式な四合院を街路両脇沿いに並べる。

保全手段：店舗として再利用する。

3、群落型（面の存在）

古城：今まで残っている古い町中に存在している四合院住宅がバラバラに分散している。平遙古城

平面構成：四合院の街区となっている。

保全手段：観光資源として開発する。

太原京城における四合院の存在形式は3番目の群落型に近いと考えている。町がその四合院住宅を守り、町の大部は四合院住宅に構成され、一方が減れば、他方も立ち行けない共存関係にあると現実がある。町と町家対して、保全と再生両方を並行して行うべきである。

3. 2 現代の居住観点からみる四合院の可居住性

四合院の空間秩序はある程度、中国千年歴史にわたる封建制度に大きく影響され、保存か、再生活動か、もっと深く言えばどのように現代社会へ、また、現代住宅の生活スタイルに相応しく再生することが果たして可能なのかという質問を繰り返し考えていた。

単純な建築の観点からみる、四合院は住居建築として、深い文化を含んでいる。中国文化の代表の一つであり、人類社会における、伝統住居形態の一つである。北京の都市の特徴といえば、真っ直ぐな道と都市中心部の四合院エリアである。上海は「里弄」というスタイルの伝統的な集合住宅を連想するだろう。現在の中国においては、どこでも高層ビルがどんどんできて、都市本来の固有な地域性が益々喪失してつつである。

中国社会構造の変化の中で、固有の地域性を守るため、大都市でも、地方都市でも、その地区の伝統住宅を保全、また再生することが必要である。

四合院にこれからも住むことができると考える。まず、秩序がある空間を現代に生かすことは可能である。それは単純な保全ではなく、再生の行為である。すなわち、適当な手段で、四合院を住宅として使い続けていくことは可能であり、住居性も向上させることもできる。

(1) 良い住まい雰囲気の創造

四合院は独立性が高く、一棟一棟の入り口が道に直結し、家と道が一体となっているので、町並みの創造に協力できる。こうした、空間の関係により、個人と社会の距離も近くなり、また、中国人本来の客好きな性格より、多様な人間関係も形成できる。残念ながら、現代の集合住宅地の中では、人と人の人情が薄く、家と働く場所が別々にと存在し、その間で人と交流できるスペースがあまり無いというのが現実である。

(2) 商業と住まいの並行

昔から四合院住宅において、店を構えて自営業を営む事例が多かった。「前店後宅」のモデルで、家庭式の商売をすることができる。近年、四合院の改造に関わる事例の中に、四合院から単純な商業への転換がよく見られる。一般的に、四合院がレストラン、ホテル、お土産屋さんなどに改造されたと同時に経済面の価値が上がり、若者たちに対して、歴史的な建物を保全、再生する意味も伝えることになる。

(3) 四合院空間のフレキシビリティ

四合院住宅の空間形態をみると、昔は神様と家父長の位置を先ず大事に配置するという根本的な原則があり、各棟の位置、高さ、機能など、厳しい規制に左右されていた。しかし、特定の機能に特定の空間を対応させた近代的住空間とは異なる四合院の単純な構成が、多面的に深い意味を見出している。即ち、空間の配置、また、使い方などに対して、特別な規制がない時代になっており、各棟の空間を自由に配置できるようになった。年代、家族構成の変遷、住まい環境の変化などに適応しにいく状況に直面しており、新しい住まい方を形成することが必要である。今回調査より、太原京城には、高齢の婦人が一人で暮らす四合院住宅があり、85年間住み続ける中で、家族変遷とライフスタイルが変化し、それに伴って空間の使い方が変わっていたという事例を二章で述べた。

他の視点からいえば、古い建物も一種の資源である。年代不同の建築であっても様々な柔軟に再利用することが可能である。長い時間を経ても尚残っている建物は皆に使われ、フレキシビリティをもっていると言える。

(4) 高齢化社会の対応

2004年の統計によると、中国では、日本の総人口を上回る1億3400万人がすでに60歳以上である。これが2050年には4億人を超えると予測されてい

る。現在、巨大な人口大国中国では、高齢化の問題に今もこれからも直面しなければならない。

四合院は元々一階、また二階建ての低層住宅である。中国現在の社会では、都市部は、低層住宅がなかなかなく、1980年からの住区改造より、昔平屋建ての町が商業的な集合住宅に取って代わった。四合院住宅は住まい手が周りの自然環境や生態系を楽しむことができる。中庭は年寄りにとって外部環境に触れやすい場所をとなり、人と触り合うチャンスをつくることができる。

しかし、現在中国都市の中では、住居密度の高い都心部の住宅は共同化、高層化などによって周辺に自然が少なくなり、騒音や空気汚染から、自身を守るための閉鎖的なかたちになっている。都市で自然をみることは、今や珍しくなった。高齢者たちは、住宅地の共有的な公園に行かなければ、なかなか本物の自然と触れ合う機会がないのが現状である。

四合院住宅が老人ホーム、ケア付き高齢者住宅などへの再生の事例がある。例えば北京の中心部の西単からさほど遠くない横丁にある豊頤園老人ホームは、役所の豊頤園地区出張所が投資して建てた福利公益的な老人ホームである。古風で上品な四合院の中には施設が完備しており、静かで清潔である。政府が建てたこの福利施設は、老人たちから毎月800～1000元（1万円～1,5万円）の費用を受け取っている。ベッドは30床しかないが、金融街地区では最大の老人ホームとしてよく知られている。

3. 3 太原县城の全体の把握

3. 3. 1 町の位置づけと問題点

太原县城は現状の機能分布図から読みとれるように、80%以上の建物は住宅である。実際に現地に行ってみると、主要な道路の両脇がほとんど商業店舗になっている。そして、歴史的な市街地の雰囲気は全く感じられない。歴史的な町を回復しようとする民間のまちづくり活動は、現在も進んでいる。ただ、結局どのようなまちになるのかという町としての位置づけを明らかにすべきである。

町全体の現状、建物の形態、またヒアリング調査などを通じて、太原县城は歴史的な観光地と住居と一体するような町を形成する動向があることが明らかになった。観光地と住居のバランスをどうやって妥当的に把握するのが検討の必要である。

現地を初めて訪れた際に、当地の土地民間县城保護と開発機関にから、現在進んでいる状況を伺ったところ、この二年間、民間の研究会がどんどん開かれ、東南大学建築設計研究院の先生と学生たちが現場で実測や調査を行っていることが分かった。2010年二回目現地へ行った時に、その歴史的な四合院の入り口前に「歴史建物」の標識（写真3-1）も掲げられていたことも観察できた。確かに、「歴史文化名城／名村」への申請に成功すれば、县城はこれから、地区の中心として観光地になるはずである。また歴史的文化財資源が多い区域で、周辺の晋祠、天龍山などと一体になっていくことを皆が期待している。



写真3-1：「歴史建物」の標識
筆者撮影より 2010. 8

同じ晋中地区にある古城の事例とする平遙古城は、1980年から、開発され、1997年、ユネスコの世界遺産に登録され、現在世界の中の有名な観光資源となっている。開発の際、まず、古城内2/3の人口が古城外の新しい集合住宅に転居させるという政策が決まっていた。残された人たちには古城の資源を経営する責任を分配することを目指していた。確かに、歴史的な町は、昔の人口数に合うため、造られたのである。建造した時には、地区の人口数の変化を予測できなかっただろう。

2010年12月15日広州日報のニュースで、「平遙古城の危機」というタイトルの記事があり、古城の外へ転居することが大変であるという内容だった。2005年まで、半分以上の人口を減少することを目指しても、2010年までに30%の人口だけしか外に転居しなかったのである。即ち、66.7%の目標まで、時間が結構かかると思われる。一つ県の経済力によって、3万人（平遙古城の総人口約5万人）に転居させることは確かに無理である。

もし以上の事例を参照すると、太原県城をこのように保全すれば、人口を減少させることはきっと大きな問題となるだろう。また、県城の住民としても、大変なことに直面しなければ、ならないである。外に出れば、高価な商品住宅を買えず、逆に、歴史的な町としても、そんなに大量な人口重荷を負担できないである。

3. 3. 2 観光と住居機能のバランス

歴史的な住居地である太原県城は、今後観光地となりながらも、住居地としての整備をすることの方が大切であると思う。観光といえば、外部からの観光者たちに対して、歴史文化を伝えるため、まちをつくることになる。住居地は当地にずっと住んでいる住民たちに対して、これからどのようにするべきなのか考える必要がある。住民たちが住み続ければ、この古城は博物館ではなく、生きている文化財と見なされる。全域面積80%以上を占めている四合院住宅は、古城の本体である。

単純に観光地にするとすると、太原市の南へ100kmの所に位置する平遙古城と比べて、太原県城の規模や影響力のレベルは確かに低く、同じ晋中地域、同じ歴史時代のもの、また、同じような古城を復元するのは無意味であると思う。太原県城の現状として、現存していて、うまく保全された文化財の建物軒数が少ない。観光地と再生する場合、現存しないものを復元すれば、明・清時代の町並みを再現することは可能である。ただ、復元という言葉にどんな意味があるのか。辞書によると、復元とは「もとの形態・位置に戻すこと。また、戻ること。」そして再現とは「物事が再び現れること。また、再び現すこと。」となっている。つまり、残された遺構やデータなどに基づいて、かつてあった形をできる限り忠実に再現したとしても、これは当時のものとまったく同じではないだろう。オリジナルとはもっと言えない。建物は、その生涯の中で定常的に順応し、形をかえる。完全に原型に復元することは、伝統的な建築にとって全く不本意な間違った考えである。

山西省ではこのような歴史的な市街地が多く存在している。歴史的価値の高さに応じて、違う手段で対応すべきである。太原県城のような事例は、実は住居面での改善を行うことが現実的である。住民たちにとって、旧市街地でまた暮らせるように保全、再生することの方が大切である。

3. 4 四合院を再生・利用した集合住宅の提案

3. 4. 1 基本構想

四合院を再生・利用した集合住宅とは、明・清時代の四合院の建造意匠を集合住宅に取り入れるという意味ではなく、その本質は、歴史的市街地としての四合院街区の集住秩序を再編することで都市住居の継承、発展させることである。「いえ」に住むことではなく、「まち」に住むことに向いてることである。地域固有の資源を享受しつつ、住居形態を育み、地域の歴史文化の継承、発展するとともに、現代社会のライフスタイルに対応していける集合住宅づくりがその課題となる。これが伝統的な住居の知恵を現代に生かし、昔の四合院を現代に生かす出口である。

実際に四合院という住居形態の発展過程をみると、中国の社会変容とともに、昔の四合院住宅の住居秩序も自動的に変化し、現在集合住宅という住居形式をしている。昔大家族を一つの単位とした住居モデルは今や2～4人ぐらいの家族に転換され、四合院のように、贅沢な個人邸宅の様子は今や見られなくなった。現在社会では、一つ四合院に幾つかの家族が共同で住むようになっている。これは都市計画によって、制御された結果ではなく、自発的にライフスタイルと合わせて、形成されたものであり、いわゆる「大雑院」とによく知られている。四合院住宅の住居秩序がなくても、現在集合住宅になっている現状を考慮した上で、四合院の空間秩序の適度な積層化、や集合住宅化を進める必要があるといえる。

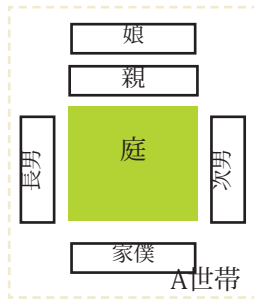


図3-1 四合院住居

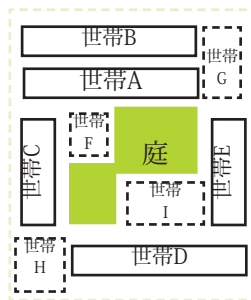


図3-2 自発式 四合院型集合住宅(大雑院)

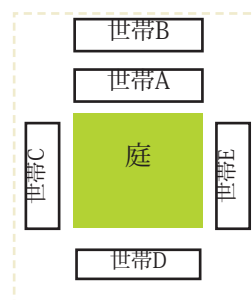


図3-3 理想式 四合院型集合住宅モデル

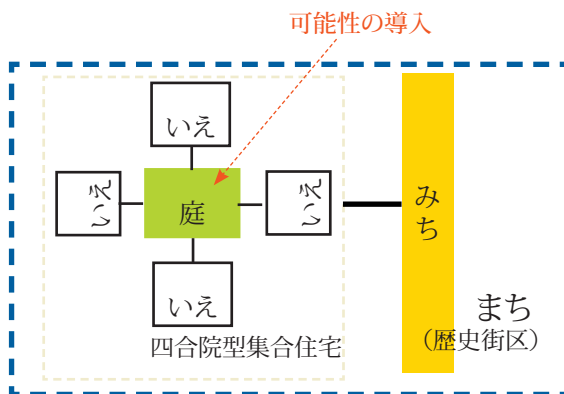


図3-4 四合院型住宅

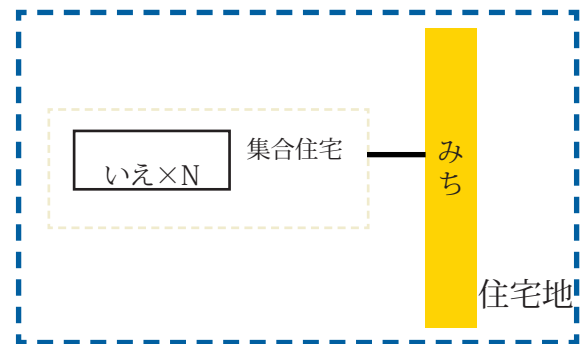


図3-5 集合住宅地

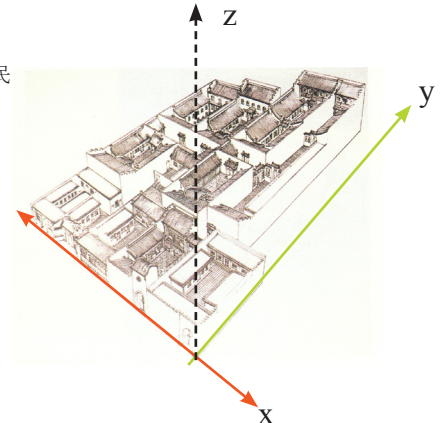
図3-4と図3-5と比べると、四合院型集合住宅は幾つの「いえ」が先ず「庭」と接続し、それが共有スペースと利用できている。それから、四合院を単位として「みち」に直接につながることで、伝統的な街区形態を造ってきた。「庭」は「いえ」と「みち」間の過度空間となり、半公共的な空間である。コミュニティ空間であり、子供の遊び場であり、さらに、住民たち相互往来するチャンスを提供できる。また、「庭」と「いえ」に一体的になると、「みち」という多様な機能をもつ公共的な空間に直接することで、よい雰囲気をもつ「まち」が成り立っていたのである。普通の集合住宅体系と比べると、「庭」の導入することは不特定多数の可能性をいれたようである。

3. 4. 2 太原県城の提案について



太原県城の場合は、その四合院型集合住宅までに転換することが最も可能である。前文で述べていたように、地域性をもつこの四合院住宅の特質は各X、Y、Z軸に空間の配列しやすい。四合院城塞的な商人の邸宅が根本的に四合院型集合住宅の原型である。その区別は、同じ姓氏と組み合わせた住居方式であり、よいまちをつくることに向いたことではなく、単純に家族の産業を守るため、各世帯が共同住居になっていたのである。

図3-7 商人の邸宅「山西民居」より 筆者加筆



四合院住宅が多く残っているエリアを選び、街区Aと街区Bを指定する。

商、住、遊と一体的の四合院型集合住宅の街区（まち）をめざす。



図3-8 四合院集合住宅の街区イメージ図
筆者作成

四合院型集合住宅は、伝統的な住居の知恵をできるだけ現代に生かそうとするものである。図3-7より、「いえ」が四合院の秩序で新たに組み合わせられて、一つ一つの四合院と「みち」とつながり、そして、昔の「いえ」が新しい機能を与え、また、駐車場の整備や街区内のパークを組み入れて、現代の生活を充実できる「まち」を形成するようになっている。

ひとつの街区の中で、多様な建築類型の有機的な組み合わせによって、住民たちの生活需要に満足すると同時に、多様な街区空間の環境実現を確保する。

たとえば、緑のところ、公共空間（街区パーク）：それぞれの家の間に良好な公共空間を保持すべきでる。伝統建築の開放的な空間の特徴に応じるだけでなく、現代生活方面の要求にも適応した。

街路：「みち」の属性を確定され、通路とするだけの機能ではなくと指摘した。安全で快適な歩行空間を提供し、かつ適度な需要にも応じえるのが基本である。地区内の特殊な文化的景観および自然景観に対して、保護を与えるべきである。景観の特質を展示と利用するとともに、地域歴史や文化なども引き続くようになる。

そして、駐車場の整備、や袋小路の創造、安全的な街区環境を確保できるべきと考えている。

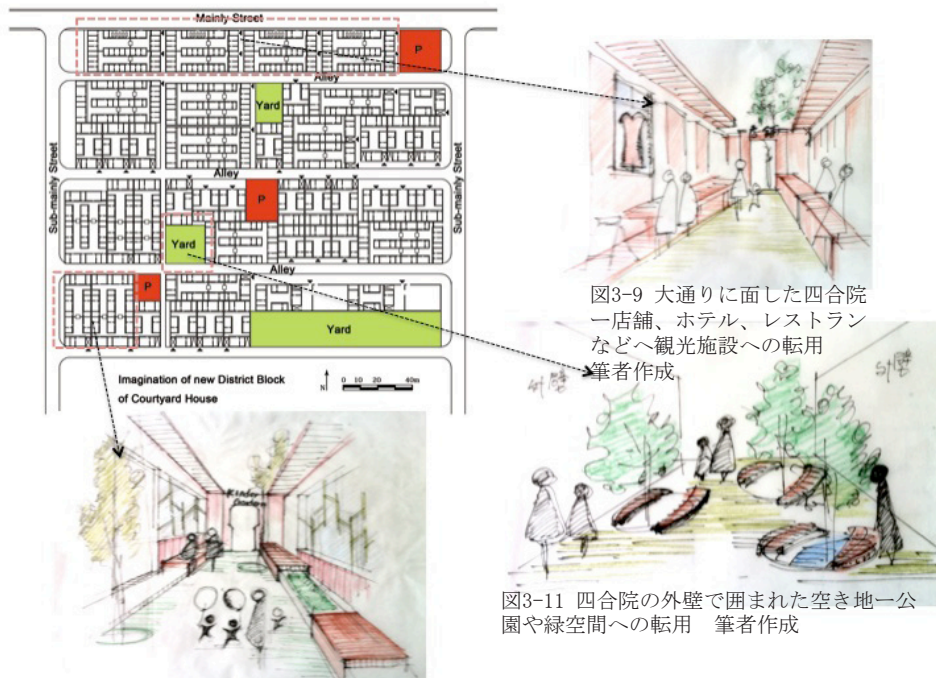


図3-10 規模が大きな四合院一幼児園、老人ホームなどの施設への転用
筆者作成

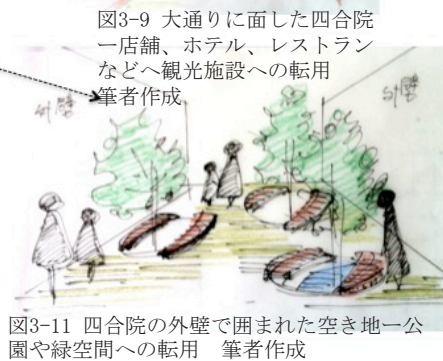


図3-11 四合院の外壁で囲まれた空き地一公園や緑空間への転用
筆者作成

第四章 結論

4. 1 結論

●調査について

現地への調査では、ヒアリング、スケッチ記録、実測、と写真撮影などにより、太原県城内の四合院住宅の空間形態の特質を記述した。

まず、複数の平面図から基本モデルや組み合わせる原理の注目し、さらに、具体的な形から図式化にした。各基本ユニットがX軸（並列）、Y軸（序列）方向への並置、連結、またZ軸（鉛直方向）へ段階の増加などは四合院体系の構成原理を明らかにした。

次の段階は構成要素の抽出を行った。①入り口（院門）、②内部空間-1（中門）、③内部空間-2 中庭、④内部空間-3 室内、⑤ディテールなどといった5つの項目である。その地区ごとに特徴を明らかにした。

ヒアリング調査より、当地の専門家の意見を聞いて、太原市、また山西省全体の視点から、もっと客観的に調査対象の位置付け、や普段にこのような町の保全、再生方法などを明らかになった。

●提案について

太原県城と中の四合院住宅の相互依存する関係を明確して、現代社会で、四合院という伝統的な住居形式を生かす可能性を述べた。可能性があると判断したと、町全体への意見、と四合院の保全、再生への提案をした。

提案は太原県城にいる四合院の空間形態の特質に基づいて、四合院型集合住宅の住居モデルを立ち上がり、また普通の集合住宅と比較した上で、理想的の街区の形成を提案した。

4. 2 考察

本研究は、太原県城の調査を通じて、その町と中いる四合院住宅の固有な特質を明らかにできた。四合院住宅の保全・再生を目指して、提案するようになった。

太原県城の開発は近年から始まったばかりなので、資料が非常に少ないである。政府や社会に重視されていることが不十分であり、実際の保全事業中で、民間の力として、まちをつくるのはずいぶん無理と思う。また、その山西省中に残っている古城に対して、慣用された手法は盲目的に復元することである。もっと悪く言えば、復元は本物をコピーすることだろう。復元できたら、観光地として開発できると思われる。

調査した時、県城内多数の四合院住宅が壊されているとみえた。実際の保全のスピードは破壊のスピードより、大部遅くなっている。住居環境が悪くて、住民たちとして住めないとよく聞いた。だから、住民たちに住み続けさせるため、その住環境の維持再生手法を提案することを目指した。

調査対象において、「復元事業」を再検討することを通じて、各地方は、地域性をもつ歴史的な住まい環境を重視すべきことを喚起したい。そして、歴史遺構に新たに対応手段が必要であり、単純な復元式な修復ではなく、適度な大胆に現代的な改修、再生することを期待したいと考えている。

●参考文献

著者論文

- ・劉 煥頤，富岡 義人：「A Study on Chinese Courtyard Dwellings and Quest of Contemporary Inhabitation Spaces Design」，第47回東海支部研究報告集，pp. 709-712，2009，2.
- ・劉 煥頤，富岡 義人：「北京及び山西省太原市周りの地区四合院形式住宅の比較 -中国北方地区の民家形式とその応用に関する研究 その1」，日本建築学会学術講演梗概集(東北)，pp. 685-686，2009，8.
- ・劉 煥頤，富岡 義人：「中華人民共和国山西省太原市の太原県城の旧市街地区の町並調査についての報告 中国北方地区の民家形式とその応用に関する研究 その2」，日本建築学会学術講演梗概集(東北)，pp. 241-242，2010，9.

参考論文

- ・福川裕一：「中国の伝統的都市住宅（町家）と町並み保存」昭和女子大学国際文化研究所紀要 5，pp. 65-74，2001.
- ・謝璞：「歴史的建築(四合院)再生による北京豊盛地区都市住まい空間の再構築 -歴史性を根拠としての持続的空間デザイン」，京都精華大学紀要 (31)，pp. 17-49，2006.
- ・葉華，浅野聡，戸沼幸市：「中国における歴史的環境保全のための歴史文化名城保護制度に関する研究 -名城保護制度の枠組みの整備過程の特徴と課題」

参考図書

- ・巽 和夫(編集)，町家型集合住宅研究会(編集)：「町家型集合住宅—成熟社会の都心居住へ」，学芸出版社，1999.
- ・アンドリュー・ボイド(著)，田中淡(訳)：「中国の建築と都市」，鹿島出版会，1979.
- ・陣内 秀信：「中国北京における都市空間の構成原理と近代の変容家庭に関する研究」住総建研究，住宅総合研究財団，1996，12/26.
- ・東南大学建築設計研究院：「明・太原県城歴史旧市街地の計画案」，2009年1月

- ・姚富生（著）：「古太原県城」，「太原県城古蹟図録」，山西人民出版社，2006.
- ・晋陽文化民間研究会：「古太原県城保護や修復研究会資料」，2007.

●図版出典

本研究掲載いた図版はほとんど筆者の作成、撮影によること、及び土地民間県城保護と開発組織の同意の資料から作成したものである。

- ・東南大学建築設計研究院：「明・太原県城歴史旧市街地の計画案」，2009年1月
- ・王金平，徐強，韓尉成（著）：「山西民居」，中国建築工業出版社，2009年12月

●現地調査に関わる謝辞について

本調査をまとめるにあたり問い合わせ並びにヒアリング調査に、ご協力頂きました：太原市市政設計研究院副院長 段武艦氏；太原理工大学教授 王金平先生；太原市都市計画設計院設計総監 衛長樂氏；太原市文物局局長 李鋼；太原市測量設計院院長 暢開思氏；土地民間県城保護と開発組織の担当者姚富生氏、石建設氏；及び県城内村民諸氏（順不同）に深く感謝致します。

○謝辞

卒業が間近に迫ってきた複雑な感情を抱いています。日本にきてからの長く短い3年間ずっと三重大学に勉強しており、苦しい時もあり、嬉しいときもあり、人生として貴重な経験を積んできました。

本論文を書くにあたっては、本当にたくさんの方々に迷惑や心配をかけ、協力や激励をいただきました。ありがとうございます。

まず、指導教官である富岡先生には、いつも忙しい中ご相談をいただき、終始適切な助言を賜り、終始暖かく見守ってくださいました。人生の貴重な経験として、ずっと大切にすると信じています。心より深く感謝いたします。同研究室の田端先生、いつもゼミの時に、論文の内容を論理から、細かい言葉の問題までの意見をくださったことをありがとうございます。

三年前に三重大学に受け入れていただき、幸運も充実した日々を過ごせ、私の周りにいる人々のおかげであると感謝しております。日頃から何の事でもお世話になっており、ずっと私のそばにいる神谷さんには本当にありがとうございます。私の留学生時代のチューターとして、勉強や生活面に関わり色々手伝いをいただき、いつまでも、どこまでも、一生の親友として永遠に珍重します。

研究室の先輩たち田原さん、指原さん、加納さん、小池さんに「ありがとうございました」を伝えたいと思います。最初の一年は、私として、一番苦しかった時代と思いましたが、皆さんはいつも温かく見守って頂いたため、短い数月だけをかかり、日本の生活をうまく慣れてきました。

それから、ずっと一緒にここまでやってくれたM2の皆さん、関口さん、岡田さん、野並さんには、論文だけではなく、共同設計を参加したり、旅行行ったり、まだまだいろいろ、この充実した日々は皆におかげさまで、ありがとう。これからまたよろしく、頑張りましょう。

M1の米田さん、広重さん、とくに松田くん、宮司くんに、発表練習や論文の日本語をまじめにチェックしてくれたことを本当にありがたいと思います。これから、研究室を盛り上げるように、皆さんつづいて頑張ってください。

最後に、私の長い留学生活を支えてくれた家族に感謝を伝えて謝辞を締めたいと思います。